裁判所構成法

裁判所構成法
司法事務
外國裁判所ノ囑託
判事檢事登用試驗規則
判事懲戒法
裁判所書記登用試驗規則
執達吏規則
辯護士法
辯護士試驗規則
公證人法
公證人手數料規則
行政裁判法
訴願法

266
858
CZ
773
06

特62
517
C2
773
06

●裁判所構成法目次

裁判所構成法(二三、法律六四)

第一編　裁判所及檢事局
第一章　總則……一
第二章　區裁判所……三
第三章　地方裁判所……五
第四章　控訴院……八
第五章　大審院……一〇
第二編　裁判所及檢事局ノ官吏
第一章　判事又ハ檢事ニ任セラルルニ必要ナル準備及資格……一三
第二章　判事……一四
第三章　檢事……一六
第四章　裁判所書記……一六
第五章　執達吏……一八
第六章　延丁……一八
第三編　司法事務ノ取扱
第一章　開廷……二六
第二章　裁判所ノ用語……二九
第三章　裁判ノ評議及言渡……三〇
第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程……三三
第五章　司法年度及休暇……三五
第六章　法律上ノ共助……三九
第四編　司法行政ノ職務及監督……四三
附則……五〇
○裁判所構成法施行條例(二三、法律六五)……五六
○司法事務共助法(四四、法律五二號)……五九
○司法事務ノ共助ニ關スル費用ノ件(四四、勅令二六八號)……六〇

法制局
45.2.26
刑
内交

○外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法（三八、法律六三號）……三一
○判事檢事登用試驗規則（二四、司法省令三號）
第一章　試驗委員……三三
第二章　受驗資格……三三
第三章　第一回試驗……三四
第四章　實地修習……三五
第五章　第二回試驗……三六
○判事懲戒法（二三、法律六八號）
第一章　總則……三八
第二章　懲罰……三八
第三章　懲戒裁判所……三八
第四章　裁判手續……四〇
第五章　職務停止……四三
第六章　懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係……四四
第七章　補則……四四
○裁判所書記登用試驗規則（二四、司法省令四號）
第一章　試驗……四四
第二章　實地修習……四五
○執達吏規則（二三、法律五一號）……四七
○執達吏手數料規則（二三、法律五二號）……五一
○執達吏登用規則（二三、司法省令二號）……一五六
○執達吏懲戒令（四一、勅令一五三號）……六〇
○辯護士法（二六、法律七號）
第一章　辯護士ノ資格及職務……六三
第二章　辯護士名簿……六四
第三章　辯護士ノ權利及義務……六五
第四章　辯護士會……六五
第五章　懲戒……六六
附則……六七
○辯護士名簿登錄規則（二六、司法省令五號）……六七
○辯護士試驗規則（二六、司法省令九號）……六八
○公證人法（四一、法律五三號）
第一章　總則……七一
第二章　任免及所屬……七二
第三章　職務執行ニ關スル通則……七三
第四章　證書ノ作成……七五
第五章　認證……八三
第六章　代理兼務及受繼……八四
第七章　監督及懲戒……八六
附則……八七
○公證人法施行細則（四二、司法省令一四號）……八八
○公證人手數料規則（四二、勅令一七四號）……九二
○公證人懲戒委員會規則（四二、勅令一七五號）……九八
○行政裁判法（二三、法律四八號）
第一章　行政裁判所組織……一〇一
第二章　行政裁判所權限……一〇三
第三章　行政訴訟手續……一〇四
第四章　附則……一〇七
○行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件（二三、法律一〇六號）……一〇七
○訴願法（二三、法律一〇五號）……一〇九

●裁判所構成法（明治二十三年二月十日法律第六號）

朕裁判所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判所構成法

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第一條　左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一　區裁判所
第二　地方裁判所
第三　控訴院
第四　大審院

第二條　通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條　地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條　裁判所ノ設立廢止及管轄區域竝ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條　各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラルルヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其ノ事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條　檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條　各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限リ別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第九條　區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條　法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一　權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二　裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三　法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四　二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章　區裁判所

第十一條　區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條　事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條　區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同ク毎年前以テ之ヲ定ム

第十四條　區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一　二百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額ニ百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二　價額ニ拘ラス左ノ訴訟

（イ）住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

（ロ）不動産ノ經界ノミニ關ル訴訟

（ハ）占有ノミニ關ル訴訟

（ニ）雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

（ホ）左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

（一）賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

（二）旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第十五條　區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一　未成年者瘋癲者白癡者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二　不動産及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三　商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條ノ一　區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル

第一　拘留又ハ科料ニ該ル罪

第二　竊盜ノ罪

第三　竊盜及刑法第二百五十四條ノ罪ノ贓物ニ關スル罪

第四　刑法第百三十條、第百七十五條、第百八十五條乃至第百八十七條及第二百九條ノ罪並ニ第百三十條ノ未遂罪

第五　一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪

二個以上ノ主刑中其ノ一個ヲ科スヘキ罪ニシテ其ノ刑前項第一又ハ第五ノ規定ニ適セサルモノアルトキハ區裁判所ハ其ノ裁判權ヲ有セス

第十六條ノ二　前條第一項第五ニ記載シタル罪ニ付テハ累犯又ハ併合罪トシテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其ノ裁判權ヲ有ス

第十六條ノ三　司法大臣ハ地方裁判所ノ管轄區域內ノ一ノ區裁判所ノ管轄ニ屬スル刑事ノ事務ノ全部又ハ一部分ヲ其ノ地方裁判所ノ管轄區域內ノ他ノ區裁判所ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得

第十七條　前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條　各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

第三章　地方裁判所

第十九條　地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所ト

ス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第二十條　各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第二十一條　司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

第二十二條　各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年前以テ之ヲ定ム

前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スヘシ

第二十三條　或ル部ニ於テ著手シタル事務ニシテ司法年度ノ終ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコトヲ得

豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ同シ

第二十四條　第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置一タヒ定マリタルトキハ一部ノ事務多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久シク闕勤スル者アル等引續キ差支アルニ非サレハ司法年度中之ヲ變更セス

裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法大臣適宜ト認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得

第二十五條　地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ハ其ノ管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ニ其ノ代理ヲ命スルコトヲ得

第二十六條　地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二　第二審トシテ

(イ)　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ)　區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條　地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限竝ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二　第二審トシテ

(イ)　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ)　區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條　地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條　地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

第三十條　地方裁判所ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ

行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第三十一條　司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域内ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲一若ハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム

支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ用ヰルコトヲ得此ノ場合ニ於テ判事ヲ選用スルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域内ノ區裁判所判事ニ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關ル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

第三十二條　地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第三十三條　各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

第四章　控訴院

第三十四條　控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條　各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條　事務ノ分配及結了並ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十二條第二十三條及第二十五條ヲ左ノ變更ヲ以テ控訴院ニ適用ス

第一　前項ニ揭ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタル權ハ控訴院長ニモ之ヲ與ヘタルモノトス

第二　控訴院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其ノ控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其ノ裁判所ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得但シ豫備判事ヲ用ヰルコトヲ得ス

第三十七條　控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三　地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三十八條　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス

第三十九條　控訴院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第四十條　控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第四十一條　第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判ス其ノ五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

第四十二條　各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク檢事長並ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章　大審院

第四十三條　大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第四十四條　大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第四十五條　大審院ノ事務ノ分配並ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席セントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其ノ所在地ノ控訴院長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十六條　大審院長ハ何時ニテモ部長若ハ部員ノ承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

第四十七條　大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適用ス

第四十八條　大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟一切ノ事ニ付下級裁判所ヲ羈束ス

第四十九條　大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付曾テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其ノ部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其ノ報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命ス

第五十條　大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　終審トシテ

（イ）第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

（ロ）控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二　第一審ニシテ終審トシテ

刑法第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノ

ノ豫審及裁判

第五十一條　前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ爲ス爲控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ

開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

第五十二條　大審院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第五十三條　大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第五十四條　第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部ノ判事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部聯合スルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判事中官等最モ高キ者ヲ部長ト爲ス大審院長ハ至當ナリト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

第五十五條　大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第一審ニシテ終審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十六條　大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク檢事總長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第二編　裁判所及檢事局ノ官吏

第一章　判事又ハ檢事ニ任セラルルニ必要ナル準備及資格

第五十七條　判事又ハ檢事ニ任セラルルニハ第六十五條ニ揭ケタル場合ヲ除キ二回ノ競爭試驗ヲ經ルコトヲ要ス

第五十八條　志願者前條ノ競爭試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此ノ試驗ニ關ル細則ハ判事檢事登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第一回試驗ニ及第シタル者ハ第二回試驗ヲ受クルノ前試補トシテ裁判所及檢事局ニ於テ一年六月以上實地修習ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ修習ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第五十九條　司法大臣ハ試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得此ノ罷免ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第六十條　一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得

豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條　試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有セス

第一　訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二　證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三　登記ヲ爲ス事

第六十二條　第二回ノ競爭試驗ニ及第シタル試補ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得

第六十三條　新任ノ判事又ハ檢事ハ闕位アルトキ之ヲ區裁判所若ハ地方裁判所ノ判事又ハ區裁判所若ハ地方裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ補ス

司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事又ハ檢事ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務スルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ裁判所ノ檢事局ニ用ウ

第六十四條　區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ檢事局ニ用ヰラレタル豫備判事又ハ豫備檢事ハ判事又ハ檢事差支アリテ職務ニ從事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキハ第三十二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍内ニ於テ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得

第六十五條　三年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ掲ケタル試驗ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得

帝國大學法科卒業生ハ第一回試驗ヲ經スシテ試補ヲ命セラルルコトヲ得

第六十六條　左ニ掲ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章　判事

第六十七條　判事ハ勅任又ハ奏任トシ其ノ任官ヲ終身トス

第六十八條　大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條　五年以上判事タル者又ハ五年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十條　十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十一條　第六十九條及第七十條ニ掲ケタル年限ヲ算スルニハ補職ノ時マテ各〻其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條　判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一　公然政事ニ關係スル事

第二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三　俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四　商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條　第七十四條及第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セラルルコトナシ但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルルハ此ノ限ニ在ラス

前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條　判事身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十五條　法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條　判事ノ官等俸給及進級ニ關ル規程

ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第七十七條　判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條　判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追ヲ始メタルカ故ニ停職シタルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章　檢事

第七十九條　檢事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十條　檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ

第八十一條　檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干渉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條　檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條　檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域內ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍內ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス

檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ管轄區域內ニ於テ或ル檢事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移スノ權ヲ有ス

第八十四條　司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域內ニ於テ發シタル命令及其ノ檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法省又ハ檢事局及內務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域內ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ム

第四章　裁判所書記

第八十五條　裁判所ニ第八條ニ從ヒ相應ナル員數ノ書記ヲ置ク

區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ノ爲少クトモ一人ノ書記ヲ置ク

第八十六條　地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置ク控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置ク」

區裁判所及檢事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記及書記長ハ各〻其ノ上官ノ命令ニ服從シテ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第八十七條　書記其ノ職務ノ範圍內ニ於テ取扱ヒタル事ハ既ニ定マリタル事務分配上其ノ事他ノ書記ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

第八十八條　書記ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス

書記長ハ奏任トス

書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十九條　書記ニ任セラルルニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經ルコトヲ要ス

志願者前項ノ試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格並ニ此ノ試驗及試驗ヲ經タル後爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十條　書記ニ任セラレタル者闕位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス

豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラルルコトヲ得

第九十一條　書記ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人ナルトキハ其ノ判事ノ命令ニ從フ

書記ハ檢事局ニ勤務スルトキ又ハ特別ノ事務ニ付判事若ハ檢事ニ附屬シタルトキモ亦其ノ檢事局又ハ判事若ハ檢事ノ命令ニ從フ

前二項ノ命令ニシテ口述ノ書取ニ關ルカ又ハ書類記錄ノ調製若ハ變更ニ關ル場合ニ於テ其ノ調製若ハ變更ヲ正當ナラスト認ムルトキ書記ハ自己ノ意見ヲ記シテ之ニ添フルコトヲ得

前四項ニ掲ケタルモノヲ除ク外書記ノ職務及其ノ事務取扱方法ハ書記ニ關ル規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十二條　合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ記ス

第九十三條　豫備書記ハ事務ノ取扱ニ於テハ書記ニ同シ但シ書記規則中ニ制限ヲ設ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五章　執達吏

第九十四條　各區裁判所ニ第九條ニ從ヒ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク

第九十五條　執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス司法大臣ハ控訴院長ニ其ノ管轄區域內ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及補スルノ權ヲ委任スルコトヲ得

執達吏ニ任セラルルニ必要ナル資格竝ニ試驗ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第九十六條　執達吏ハ手數料ヲ受ク其ノ手數料一定ノ額ニ達セサルトキ補助金ヲ受ク

第九十七條　執達吏ハ其ノ所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所管轄區域內ノ何レノ場所ニ於テモ其ノ職務ヲ行フ

第九十八條　裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ執達吏ヲ以テ之ヲ送達ス但シ書記ヨリ直接ニ若ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

執達吏ハ刑事ニ付警察官ヲ以テ執行ヲ爲ササル場合ニ限リ裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前二項ニ掲ケタルモノヲ除ク外執達吏ノ權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第九十九條　執達吏ハ其ノ職務ヲ適實ニ行フ爲保證金ヲ出スコトヲ要ス

執達吏ノ職務細則竝ニ保證金ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百條　執達吏ハ其ノ所屬裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ書記ノ上官ノ命令ニ從フ

第六章　廷丁

第百一條　廷丁ハ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ裁判所長區裁判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇ヒ及其ノ雇ヲ解ク

第百二條　廷丁ハ開廷ニ出頭セシメ及司法大臣ノ發シタル一般ノ規則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム

區裁判所ハ執達吏ヲ用ヰルコト能ハサルトキハ其ノ裁判所所在地ニ於テ書類ヲ送達スル爲廷丁ヲ用ヰルコトヲ得

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

第百三條　開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス

司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其ノ管轄區域內ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第百四條　訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル

判事ニモ亦屬ス

第百五條　裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其ノ理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此ノ場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第百六條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條　裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ著セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記錄ニ記入ス

第百八條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第百九條　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ揭ケタル違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ閉廷ノトキマテ之ヲ勾留スルノ必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以內ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此ノ處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルトキハ之ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スコトヲ得

第百十條　前條ノ規程ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一　裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ違犯者ヲ卽時ニ罰スルコトヲ得

第二　違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第百十一條　裁判長ハ不當ノ言辭ヲ用ヰル辯護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其ノ禁止ハ此ノ行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第百十二條　裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百十條第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以內ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條　第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十四條　判事檢事及裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ制服ヲ著ス

前項ノ開廷ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ著スルコトヲ要ス

第二章　裁判所ノ用語

第百十五條　裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ヰ當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用ヰ

第百十六條　通事ノ任命及使用竝ニ訴訟手續上

其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條　通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其ノ冒語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用ヰラルルコトヲ得

第百十八條　外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其ノ外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第三章　裁判ノ評議及冒渡

第百十九條　合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ冒渡ス

第百二十條　四日以上引續クヘキ見込アル刑事ノ審問ニ於テ裁判所長ハ補充判事一人ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得此ノ補充判事ハ其ノ審問ニ或ル判事ノ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ引續キ參與スルコトヲ得サル場合ニ於テ之ニ代リ審問及裁判ヲ完結スルノ權ヲ有ス

第百二十一條　判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其ノ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顚末並ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ祕密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條　評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條　裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各〻過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各〻過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條　判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程

第百二十五條　裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム

控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域內ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關リ成ルヘク統一ヲ旨トシ殊ニ裁判所及檢事局ノ開廳時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス

大審院ハ自ラ其ノ事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ認可ヲ受ク

第五章　司法年度及休暇

第百二十六條　司法年度ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ハル

第百二十七條　削除

第百二十八條　同上

第百二十九條　同上

第百三十條　同上

第六章　法律上ノ共助

第百三十一條　裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

法律上ノ輔助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第百三十二條　檢事局モ亦各自ノ管轄區域內ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第百三十三條　裁判所書記課モ亦其ノ權內ノ事件又ハ其ノ配下ノ執達吏ノ權內ノ事件ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第四編　司法行政ノ職務及監督權

第百三十四條　合議裁判所長區裁判所ノ判事若ハ監督判事檢事總長檢事長檢事正ハ司法大臣ノ由テ以テ司法行政ノ職務ヲ行フノ官吏トス

第百三十五條　司法行政監督權ノ施行ハ左ノ規程ニ依ル

第一　司法大臣ハ各裁判所及各檢事局ヲ監督ス

第二　大審院長ハ大審院ヲ監督ス

第三　控訴院長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域內ノ下級裁判所ヲ監督ス

第四　地方裁判所長ハ其ノ裁判所若ハ其ノ支部及其ノ管轄區域內ノ區裁判所ヲ監督ス

第五　區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所所屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス

第六　檢事總長ハ其ノ檢事局及下級檢事局ヲ監督ス

第七　檢事長ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル控訴院管轄區域內ノ檢事局ヲ監督ス

第八　檢事正ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル地方裁判所管轄區域內ノ檢事局ヲ監督ス

第百三十六條　前條ニ掲ケタル監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

第一　官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付其ノ注意ヲ促シ並ニ適當ニ其ノ事務ヲ取扱フコトヲ之ニ訓令スル事

第二　官吏ノ職務上ト否トニ拘ラス其ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付之ニ諭告スル事

但シ此ノ諭告ヲ爲ス前其ノ官吏ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第百三十七條　第十八條及第八十四條ニ掲ケタル官吏ハ第百三十五條ニ依リ行フヘキ監督ヲ受クルノ官吏中ニ之ヲ包含ス

第百三十八條　裁判所若ハ檢事局ノ官吏ニシテ適當ニ其ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其ノ行狀其ノ地位ニ不相應ナル者ニ付第百三十六條ヲ適用スルコト能ハサルトキハ懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第百三十九條　前數條ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ハ判事若ハ檢事其ノ官吏タルノ資格又ハ其ノ他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付其ノ請求ヲ滿足セシムル爲之ヲ執行スルコトヲ得ス

第百四十條　司法事務取扱ノ方法ニ對スル抗告殊ニ或ル事務ノ取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ延滯若ハ拒絕ニ對スル抗告ハ此ノ編ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第百四十一條　裁判所及檢事局ハ司法大臣又ハ監督權アル判事若ハ檢事ノ要求アルトキハ法律上ノ事項又ハ司法行政ニ關ル事項ニ付意見ヲ述フ

第百四十二條　司法官廳ニ對シテ起リタル民事ノ訴訟ニ於テハ其ノ訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ檢事局ハ司法官廳ヲ代表ス

第百四十三條　此ノ編ニ掲ケタル前各條ノ規程ハ裁判上執務スル判事ノ裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ

附　則

第百四十四條　此ノ法律ノ施行ニ關ル規程並ニ從來ノ法律ニシテ此ノ法律ニ牴觸スト雖モ當分ノ內仍ホ效力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

附則（明治四十一年法律第三十號）

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ニ提起シタル訴訟ハ本法ニ依リ他ノ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノト雖モ受訴裁判所之ヲ裁判スヘシ

本法施行後重禁錮又ハ輕禁錮ニ處スヘキ罪ノ裁判權ニ付テハ重禁錮ヲ懲役ト看做シ輕禁錮ヲ禁錮ト看做ス

●裁判所構成法施行條例

（明治二十三年三月十九日法律第二十二號）

朕裁判所構成法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所構成法施行條例

第一條　從來ノ治安裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所トシ從來ノ始審裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所トシ又從來ノ控訴院大審院ハ裁判所構成法ニ定メタル控訴院大審院トス

第二條　始審裁判所從來ノ檢事局ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所ノ檢事局トス控訴院大審院ノ檢事局モ亦同シ

第三條　區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判所管轄區域ニ及ホスモノトス

第四條　裁判所構成法實施前他ノ裁判所第一審トシテ受理シタル民事訴訟及刑事訴訟ニシテ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノハ現在ノ儘相當ノ區裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ區裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五條　裁判所構成法ニ依リ地方裁判所ノ第二審ニ屬スヘキモ既ニ控訴院ニ於テ受理シタル事件ハ控訴院之ヲ裁判スヘシ又控訴院ノ管轄ニ屬スヘキモ既ニ大審院ニ於テ受理シタル民事刑事ノ上告ハ大審院之ヲ裁判スヘシ

第六條　裁判所構成法實施前重罪裁判所ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ地方裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七條　裁判所構成法實施前始審裁判所ニ於テ受理シタル郡長區長戶長又ハ市長町長村長ニ對スル民事訴訟ハ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト雖其ノ地方裁判所之ヲ裁判シ控訴院ニ於テ受理シタル官廳ニ對スル民事訴訟ハ其ノ控訴院之ヲ裁判スヘシ

第八條　裁判所構成法實施前高等法院ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ裁判所ニ移ルモノトス高等法院ニ於テ裁判スヘキ事件ヲ通常裁判所ニ於テ受理シタルモノモ亦同シ

第九條　明治十八年第三十一號布告違警罪卽決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十條　明治十八年第十二號布告普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十一條　明治二十一年勅令第六十四號ハ仍效力ヲ有ス

區裁判所出張所ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

北海道及島嶼ニシテ區裁判所遠隔ノ地方ニ於テ司法大臣ハ郡長町長又ハ村長ニ委任シテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十二條　東京地方裁判所管內小笠原島及伊豆七島ニ於テ民事刑事ノ訴訟ニシテ區裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノ及非訟事件ハ裁判所設置マテ島吏之ヲ取扱フ但シ刑事訴訟ノ手續ハ便

宜之ヲ取扱フコトヲ得

第十三條　沖繩縣ニ於テ民事刑事ノ訴訟及非訟事件ニシテ區裁判所及地方裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノハ裁判所設置マテ同縣官吏之ヲ取扱フ但シ控訴院ノ裁判權ニ屬スルモノハ長崎控訴院ノ管轄トス

第十四條　削除

第十五條　明治二十一年勅令第七十一號清國並ニ朝鮮國駐在領事裁判規則ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ要スルコトナシ

第十六條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ同法第二編第一章ノ要件ヲ必要トセス

第十七條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ書記ハ同法第二編第四章第八十九條ノ要件ヲ必要トセス

第十八條　裁判所構成法實施後三年間ハ司法大臣ハ試補實地修習ノ時間ヲ一年六箇月マテニ減縮スルコトヲ得

明治十七年太政官達第百二號判事登用規則及明治二十年勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ試補ト爲リタル者ハ第二回試驗ヲ要セスシテ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第十九條　裁判所構成法實施後一年間ハ司法大臣ハ同法第二編第二章第六十九條及第七十條ノ規程ニ拘ラス補職ヲ爲スコトヲ得

第二十條　三年以上裁判官又ハ檢察官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上法制局參事官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上司法省高等官（會計局ノ高等官ヲ除ク）ノ職ヲ奉シタル者ハ裁判所構成法實施後一年間ハ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第二十一條　裁判所構成法第二編第二章第七十四條及第七十五條ハ檢事ニ非ス亦之ヲ適用ス

●司法事務共助法（明治四十四年三月三十日法律第五十二號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル司法事務共助法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

司法事務共助法

第一條　內地及樺太、朝鮮、臺灣、關東州又ハ帝國ノ領事裁判權ヲ行フ地域ニ於テ司法事務ヲ取扱フ官廳間ノ司法事務ノ共助ハ本法ニ依ル

第二條　司法事務ヲ取扱フ官廳ハ民事及刑事ニ關シ相互ニ左ノ事項ヲ囑託スルコトヲ得

一　訴訟書類ノ送達

二　證據調

三　令狀ノ發付及執行

四　犯罪ノ搜査

第三條　民事ノ判決ハ其ノ執行力アル正本ニ基キ司法事務ヲ取扱フ他ノ官廳ノ管轄區域內ニ於テ其ノ强制執行ヲ爲スコトヲ得但シ執行地ノ法令ニ依リ許スヘカラサル請求ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ハ假差押又ハ假處分ノ命令ノ執行ニ之ヲ準用ス

第四條　刑事ノ判決ハ謄本ヲ送付シテ其ノ執行ヲ囑託スルコトヲ得但シ死刑又ハ笞刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ囑託ニ依ル執行ニ付テハ刑名同シキモノハ之ヲ同一ノ刑ト看做シ舊韓國法規ノ流刑又ハ禁獄ハ之ヲ禁錮ト看做ス

第五條　前條ノ規定ニ依リテ囑託ヲ受ケタル官廳ハ其ノ管轄區域內ノ監獄ニ於テ刑ノ執行ヲ繼續スルコト能ハサル事由ヲ生シタルトキハ

囑託ヲ爲シタル官廳ニ其ノ管轄區域內ノ監獄ニ於テ繼續シテ之ヲ爲スヘキコトヲ請求スルコトヲ得

第六條　司法事務ノ共助ニ關スル費用並受刑者及刑事被告人ノ護送ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治四十四年勅令第二百六十七號ヲ以テ同年十一月一日ヨリ施行ス）

●司法事務ノ共助ニ關スル費用並受刑者及刑事被告人ノ護送ニ關スル件

（明治四十四年十月二十四日勅令第二百六十八號）

朕司法事務ノ共助ニ關スル費用並受刑者及刑事被告人ノ護送ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　司法事務共助法ニ依ル共助ニ關スル費用ハ囑託ヲ受ケタル官廳ノ支辨トシ事宜ニ依リ關係官廳ノ協議ヲ以テ囑託ヲ爲シタル官廳ハ囑託ヲ受ケタル官廳ニ對シ費用ノ全部又ハ一部ヲ補償スルコトヲ得

第二條　受刑者及刑事被告人ノ護送ニ關スル手續ハ護送地ノ規定ニ依リ其ノ費用ハ護送ヲ爲ス官廳ノ支辨トシ內地及樺太、朝鮮、臺灣、關東州又ハ帝國ノ領事裁判權ヲ行フ地域相互ノ間ニ於ケル航海中ノ費用ハ國庫ノ負擔トス

附則

本令ハ明治四十四年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

●外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法

（明治三十八年三月十三日法律第六十三號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法

第一條　裁判所ハ外國裁判所ノ囑託ニ因リ民事及刑事ノ訴訟事件ニ關スル書類ノ送達及證據調ニ付法律上ノ輔助ヲ爲ス

法律上ノ輔助ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第二條　受託事項カ他ノ裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ受託裁判所ハ囑託ヲ管轄裁判所ニ移送スヘシ

第三條　受託事項ハ日本ノ法律ニ依リ之ヲ施行スヘシ

第四條　囑託ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ拒絕スヘシ

一　日本ノ法律ニ依レハ受託事項カ其ノ施行ヲ許スヘキモノニ非サルトキ

二　受託事項カ受託裁判所ノ管轄ニ屬セサル場合ニ於テ第二條ノ手續ヲ爲スコト能ハサルトキ

三　相互條件ノ存セサルトキ

●判事檢事登用試驗規則

（明治二十四年五月十五日 司法省令第三號）

判事檢事登用試驗規則左ノ通相定ム

判事檢事登用試驗規則

第一章　試驗委員

第一條　判事檢事登用試驗委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　判事檢事登用第一回試驗委員長及委員ハ司法省高等官及判事檢事中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試驗委員ヲ囑託スルコトアルヘシ

判事檢事登用第二回試驗委員長ハ司法次官ヲ以テ之ニ充テ試驗委員ハ常任ヲ三名トシ司法省高等官及判事檢事中ヨリ司法大臣之ヲ命ス其他ノ委員ハ司法省高等官及判事檢事中ヨリ臨時司法大臣之ヲ命ス

試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

第三條　判事檢事登用試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

試驗委員長ニ闕員又ハ事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第四條　判事檢事登用試驗委員長及委員ニハ二百圓以內ノ手當ヲ給シ試驗委員附屬ノ書記ニハ三拾圓以內ノ手當ヲ給ス

第二章　受驗資格

第五條　判事檢事登用試驗ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ニ記載シタル者ニ限ル

一　官立學校及專門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校（別科ヲ除ク）ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

二　司法大臣ニ於テ指定シタル公立又ハ私立ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

三　司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

前項第二號ハ明治四十年七月三十一日以後卒業スル者ニハ之ヲ適用セス

第六條　裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第三章　第一回試驗

第七條　第一回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條　試驗志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ

一　履歷書

二　身分年齡及兵役ニ關スル證明書

三　第五條ニ定メタル要件ノ證明書

試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ムヘシ但其手數料ハ登記印紙ヲ用ヰ之ヲ志願書ニ貼付スヘシ

手數料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第八條ノ二　試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トシ尙身體檢査ヲ行フ

第八條ノ三　豫備試驗ハ受驗者ノ本試驗ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トス

第八條ノ四　豫備試驗ハ左ノ科目ニ付キ之ヲ施行ス

一　論文

二　外國語

外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第八條ノ五　試驗委員豫備試驗ノ答案ヲ調査シタル後本試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ本試驗ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第八條ノ六　豫備試驗ノ方法ハ試驗委員長之ヲ定ム

第九條　本試驗ハ受驗者ノ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第十條　筆記試驗ハ憲法民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法行政法國際公法國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗及身體檢査ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

身體檢査ニ合格セサル者ハ前二項ノ規定ニ拘ラス落第トス

第十四條　志願者口述試驗又ハ身體檢査ニ關席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第十五條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條　帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章　實地修習

第十七條　試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢

事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條　修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條　試補ハ修習日錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此日錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間二箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間一箇月以内亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條　試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條　試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章　第二回試驗

第二十三條　第二回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ

試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定ム

第二十四條　試補第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習日錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條　司法大臣ハ第二回試驗ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二十六條　第二回試驗ハ受驗者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第二十七條　試驗委員ハ試補ニ筆記試驗ノ爲メ二件以上ノ訴訟記錄ヲ付與スヘシ

第二十八條　受驗者ハ付與セラレタル訴訟記錄ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ試驗委員長ノ定メタル日時内ニ之ヲ差出スヘシ若シ之ニ違ヒタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第二十九條　口述試驗ノ方法ハ委員長之ヲ定ム

第三十條　試補第二回試驗ニ及第セサル場合ニ於テハ更ニ六箇月間修習ヲ爲シタル後試驗ヲ受クルコトヲ得

第三十一條　試補第二回試驗ノ成立タサル場合ニ於テハ司法大臣ノ相當ト認ムル時期ニ於テ更ニ試驗ヲ受クルコトヲ得

第三十二條　第一回試驗ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試驗ニモ亦之ヲ適用ス

●判事懲戒法（明治二十三年八月二十一日法律第六十八號）

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事懲戒法

第一章　總則

第一條　凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一　職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二　官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章　懲罰

第二條　懲罰ハ左ノ如シ

第一　譴責

第二　減俸

第三　轉所

第四　停職

第五　免職

第三條　前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條　減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以内ヲ減ス

第五條　轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條　停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條　免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章　懲戒裁判所

第八條　懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條　控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條　懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條　大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一　第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二　控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條　懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章　裁判手續

第十七條　懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條　檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條　抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條　開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條　開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條　懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事台ハ管轄區域內ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條　下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條　受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條　受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時內ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條　檢事ハ三日內ニ意見ヲ附シ記錄ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條　懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條　前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條　懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條　辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條　口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條　懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條　被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用ヰルコトヲ得

第三十四條　懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條　判決ハ卽時ニ之ヲ言渡ス若シ卽時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日內ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條　被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖モ判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條　評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ

第三十八條　被告及檢事ハ十四日ノ期間內ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決

言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條　控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間內ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條　懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條　懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條　控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ

若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條　第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程ヲ適用ス

第四十四條　控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記錄ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條　調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條　懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條　懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條　懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章　職務停止

第四十九條　判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第一　刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二　刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三　懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條　刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第五十一條　懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條　懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル

職務上ノ行爲ハ無效トス

第五十三條　被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章　懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條　刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條　刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章　補則

第五十六條　懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條　此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

●裁判所書記登用試驗規則

（明治二十四年五月十五日司法省令第四號）

裁判所書記登用試驗規則左ノ通相定ム

裁判所書記登用試驗規則

第一章　試驗

第一條　裁判所書記登用試驗ハ文官試驗ニ關ル勅令ノ外本則ノ規程ニ從フ

第二條　試驗ハ各控訴院又ハ地方裁判所ニ於テ之ヲ行フ

第三條　試驗委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管內地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最モ高キ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條　試驗ハ作文筆寫書取算術簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法及外國語ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條　試驗委員長ハ受驗者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試驗ヲ受ケシムルコトヲ得此場合ニ於テ試驗問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

第六條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗ノ爲メ受驗者ヲ呼出スヘシ

第七條　受驗者口述試驗ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第八條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第二章　實地修習

第十條　試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラルルコトヲ得

裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條　實地修習ノ順序ハ控訴院長檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條　實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢事正又ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢事之ヲ爲ス

指揮監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ

第十三條　裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ

又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指揮監督者之ヲ諭告スヘシ

第十四條　裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムルトキハ指揮監督者ハ控訴院長檢事長ニ之ヲ報告スヘシ

第十五條　指揮監督者ハ裁判所書記見習其指揮監督ニ係ル修習ヲ終リタルトキハ修習ニ關ル證明書ヲ作リ修習ノ成績並職務上及職務外ノ行狀ヲ記載シテ之ヲ控訴院長檢事長ニ差出スヘシ

若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ附記スヘシ

控訴院長檢事長ハ證明書ニ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十六條　本章ノ規程ハ試驗ヲ經スシテ裁判所書記見習トナリタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

●執達吏規則（明治二十三年七月二十五日法律第五十一號）

朕執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏規則

第一條　執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執行スルモノトス

第二條　執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得

第一　告知及催告ヲ爲スコト

第二　動產不動產ノ任意競賣ヲ爲スコト

第三　拒證書ヲ作ルコト

第三條　執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ニ關スル事務殊ニ左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ

第一　書類物品ノ送付ヲ爲スコト

第二　罰金科料過料ヲ徵收シ及沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却スルコト

第三　令狀ノ執行ヲ爲スコト

第四條　執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ク

他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所管轄內ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條　一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書

記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フヘシ

事務分配ハ毎司法年度ノ終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其效力ヲ失フコトナシ

第八條　執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セラルヘシ

第一　自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二　自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ナルトキ

但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第三　自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第九條　執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲ニノミ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條　執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受クルトキハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條　執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲クル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一　執達吏ノ登用試驗ニ及第シタル者

第二　執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第四　區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條　執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキハ命令ヲ爲シタル裁判所及檢事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スヘシ

委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルコト能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ申立ツヘシ

第十三條　前條ノ場合其他執達吏逝去アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條　執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帶スヘシ

第十五條　執達吏ハ裁判所書記ヲ經タルト否トヲ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

執達吏ハ定規ノ手數料ヲ增減シ又ハ手數料及立替金ノ外報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條　執達吏第三條ニ掲クル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手數料ヲ受クルコトヲ得ス

但罰金、科料、過料、追徵金及公訴ニ關スル訴訟費用ノ裁判ノ執行ニ付テハ前條ノ例ニ依ル

第十七條　執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シタルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手數料十分ノ三以上ヲ支

給スベシ

第十八條　第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其職務ニ付定メタル手數料ヲ受ク及立替金ノ辨濟ヲ受ク

第十九條　執達吏一年間ニ收入セシ手數料百八拾圓ニ充タサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條　執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ勾留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲スベシ

第一　官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムルコト

第二　執達吏職務上保管シタル物品及書類ノ保全ニ必要ノ手續ヲ爲スコト

第二十一條　執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ク其恩給年額ハ第十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定ス

第二十二條　執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル

附　則

第二十三條　執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ掲クル者又ハ自己ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達吏ノ職務ニ付定メタル手數料十分ノ七以上ヲ支給スベシ

●執達吏手數料規則

（明治二十三年七月二十五日法律第五十二號）

朕執達吏手數料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スベキコトヲ命ス

執達吏手數料規則

第一條　執達吏ハ此規則ニ從ヒ手數料ヲ受ク

第二條　書類送達ノ手數料ハ一通ニ付七錢トス

第三條　有體動產及未タ土地ヨリ離レサル果實並爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押、假差押ニ付テノ手數料ハ左ノ區別ニ從フ

執行スベキ債權額　手數料

貳拾圓マテ　四拾錢

五拾圓マテ　六拾錢

百圓マテ　九十錢

貳百五拾圓マテ　壹圓貳拾錢

五百圓マテ　壹圓五十錢

千圓マテ　壹圓八十錢

千圓ヲ超エルトキハ貳圓四十錢トス

假差押ヲ爲シタル物ニ對スル差押ニ付テノ手數料ハ前項ノ手數料ノ半額トス

若シ執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條　執達吏差押、假差押ヲ爲スベキ場所ニ臨ムト雖差押フベキ物ナキトキ又ハ差押フベキ物ヲ換價スルモ强制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第五條　民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及

既ニ差押、假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタルトキ物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第六條　特定ノ動產又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取上ケ之ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手數料ヲ壹圓トス若シ執務二時間以上ニ渉ルトキハ一時間每ニ貳拾錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第七條　民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合又ハ民事訴訟法第七百三十三條第一項ノ決定ニ基キ執行ヲ爲ス場合ニ於テハ執務三時間以內ハ手數料ヲ壹圓トス若シ其執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間每ニ貳拾錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第七條ノ二　前二條ノ規定ハ假處分ノ執行ノ手數料ニ之ヲ準用ス

第八條　民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動產ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手數料ヲ受ク

第九條　動產、不動產及船舶ノ競賣ニ付テノ手數料ハ左ノ區別ニ從フ

競賣金額	手數料
貳拾圓マテ	七拾錢
五拾圓マテ	壹圓貳拾錢
百圓マテ	壹圓八拾錢
貳百五拾圓マテ	貳圓四拾錢
五百圓マテ	參圓
千圓マテ	四圓五拾錢

以上千圓每ニ壹圓ヲ加フ但千圓ニ滿タサルモ千圓ト看做シテ算定ス

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ

第十條　執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ强制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ强制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手數料ヲ四拾錢トス

第十一條　執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ强制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ强制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手數料ヲ六拾錢トス

第十二條　第三條乃至第十一條ノ手數料ヲ受クヘキ行爲ニハ强制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行爲ヲ包含ス

第一　警察上ノ援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルコト

第二　執行行爲ニ屬スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト

第三　記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スコト

第四　支拂其他ノ給付、差押金錢及賣却金ヲ受取リ、交付シ若クハ供託シ又ハ受取證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五　競賣ノ公告ヲ爲スコト

第十三條　執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一　書記料

第二　郵便料、電信料

第三　公告料

第四　證人、鑑定人ノ手當

第五　職工、役夫ノ手當

第六　有價證券ノ記名書換及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用

第七　人及物ノ送致費用

第八　物ノ保存並監視ノ費用

第九　果實收獲ノ費用

第十　旅費宿泊料

第十四條　前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一　法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記錄中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作リタルトキ但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二　供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ屆書ヲ作リタルトキ

第三　差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲ス陳述ヲ筆記シタルトキ

書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付參錢トス但十二行ニ滿タサルモ半枚ト看做シテ算定ス

第十五條　強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手數料拾五錢ヲ受ク

第十六條　拒絶證書ヲ作成スル場合ニ於テハ其手數料ヲ五拾錢トス若シ執務一時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ貳拾錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第十六條ノ二　執行記錄其他ノ書類ノ閲覽ニ付テノ手數料ハ既濟ノ書類ニ限リ一問ニ付拾錢トス

第十六條ノ三　手數料ノ定ナキ事項ニ付テハ最類似スル事項ト同一ノ手數料ヲ受ク

第十七條　證人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條　執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾五錢以下ノ旅費ヲ受ク但一里ニ滿タサルモ一里ト看做シテ算定ス

執達吏其職務ヲ執行スル爲宿泊ヲ要シタルトキハ一泊ニ付壹圓貳拾錢以下ノ宿泊料ヲ受ク

右旅費及宿泊料ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム

第十九條　執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手數料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應セサルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ爲ニ事務ヲ擔任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條　執達吏ハ委任ノ終了シタル後手數料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十條ノ二　執達吏規則第十六條但書ノ場合ニ於ケル執行ノ費用ハ被徵收者ノ負擔トス

第三條乃至第五條及第八條乃至第十一條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十一條　前條ノ場合ヲ除クノ外執達吏裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要

シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス

右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條　訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟シ能ハサル場合ニ限ル

第二十條ノ二ノ場合ニ於テ被徵收者立替金ヲ辨濟スルコト能ハサルトキハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十三條　執達吏ハ其職務執行ニ付作リタル書類ノ正本又ハ謄本ニ手數料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ又執務時間ニ應シ其辨濟ヲ受クヘキトキハ調書ニ其執務時間ヲ附記スヘシ若シ之ヲ附記セサルトキハ最短ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

附　則（明治四十四年法律第五十四號）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治四十四年勅令第百七號ヲ以テ同年五月一日ヨリ施行ス）

本法施行ノ際未タ完結セサル事項ニ付テノ手數料及立替金ハ仍從前ノ規定ニ依ル

●執達吏登用規則

（明治二十三年八月一日司法省令第二號）

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條　執達吏ニ任セラルルニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　年齡滿二十五歲以上ナルコト

第二　陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三　身體健全ナルコト

第四　家計ノ整理シタルコト

第五　品行方正ナルコト

第六　試驗ニ及第シタルコト

第二條　左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラルルコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ非ス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者

第四　懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條　執達吏ノ試驗ヲ受ケントスル者ハ少クトモ六箇月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルコトヲ要ス

職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ祕密ヲ漏洩スヘカラス

第四條　職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ

第五條　職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ

第六條　控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條　職務修習者試驗ヲ受ケントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ

判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ

控訴院長ハ書類ヲ調査シ試驗ノ許否ヲ定ムヘシ

第八條　試驗ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ

第九條　試驗委員長及試驗委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條　控訴院長ハ試驗ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試驗委員長ニ送付スヘシ

前項ノ送付アリタルトキハ試驗委員長ハ試驗期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條　試驗ハ筆記口述ノ二樣トス

口述試驗ハ筆記試驗ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條　試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

第一　民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程

第二　執達吏ニ關ル諸規則

第三　算術（加減乘除分數比例）

第四　讀書筆寫

第十三條　筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

試驗委員長ハ受驗者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得

第十四條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十五條　試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第十六條　試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非サレハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條　不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條　試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ

第十九條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條　左ニ揭グル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得

第一　官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校ニ司法省舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ敎授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第三　判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル

第四　陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條　第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ揭ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラルルコトヲ得

第二十二條　試驗及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者並ニ區裁判所書記ヨリ轉任スル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

第二十三條　執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日内ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間内ニ保證金ヲ差出ササルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

保證金ハ相當ノ價格アル公債證書日本勸業銀行發行勸業債券及貯蓄債券日本興業銀行發行債券若ハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユルコトヲ得

第二十四條　執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス

執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

附　則

第二十五條　本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試驗及任補ヲ行フコトヲ得

●執達吏懲戒令（明治四十一年六月十六日勅令第百五十三號）

朕執達吏懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

執達吏懲戒令

第一條　執達吏ノ懲戒ニ付テハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外文官懲戒令中判任官ニ關スル規定ヲ準用ス

第二條　懲戒ハ左ノ三種トス

一　免職

二　一年以下ノ停職

三　譴責

第三條　免職及停職ハ文官普通懲戒委員會ノ議決ニ依リ司法大臣之ヲ行フ

譴責ハ司法大臣之ヲ行フ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●辯護士法（明治二十六年三月四日法律第七號）

陛下帝國議會ノ協賛ヲ經タル辯護士法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

辯護士法

第一章　辯護士ノ資格及職務

第一條　辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ妨ケス

第二條　辯護士タラムト欲スル者ハ左ノ條件ヲ具フルコトヲ要ス

第一　日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト

第二　辯護士試驗規則ニ依リ試驗ニ及第シタルコト

第三條　辯護士試驗ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第四條　左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得

第一　判事檢事タル資格ヲ有スル者又ハ辯護士ニシテ其ノ請求ニ因リ登錄ヲ取消シタル者

第二　法律學ヲ修メタル法學博士、帝國大學法律科卒業生、舊東京大學法學部卒業生、司法省舊法學校正則部卒業生及司法官試補タリシ者

第五條　左ニ掲クル者ハ辯護士タルコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二　不敬罪、僞造罪、僞證罪、賄賂罪、誣告罪、竊盜罪、詐欺取財罪、費消罪、贓物ニ關スル罪、遺失物埋藏物ニ關スル罪、家

資分散ニ關スル罪及刑法第百七十五條同第二百六十條同第二百八十二條同第二百八十六條同第二百八十七條同第三百六十條ニ記載シタル定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　公權停止中ノ者

第四　破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條　辯護士ハ報酬アル公務ヲ兼ヌルコトヲ得ス但シ帝國議會議員、府縣會常置委員ト爲リ又ハ官廳ヨリ特ニ命セラレタル職務ヲ行フハ此ノ限ニ在ラス

辯護士ハ商業ヲ營ムコトヲ得ス但シ辯護士會ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二章　辯護士名簿

第七條　辯護士ハ辯護士名簿ニ登錄セラルルコトヲ要ス

第八條　各地方裁判所ニ辯護士名簿ヲ備フ

辯護士ハ其ノ氏名ヲ登錄シタル地方裁判所ノ所屬トス

刑事訴訟法第二百六十四條及第二百七十九條ノ所屬辯護士ハ受訴裁判所所在地ノ辯護士ヲ以テ之ニ充ツ

第九條　辯護士名簿ニ登錄ヲ請フ者ハ其ノ所屬地方裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ司法大臣ニ請求書ヲ差出スヘシ

登錄請求書ニハ第二條乃至第六條ノ事項ニ關スル證明書ヲ添フヘシ

第十條　登錄ヲ請フ者ハ登錄手數料トシテ金二十圓ヲ納ムヘシ

他ノ地方裁判所ニ登錄換ヲ爲ストキハ手數料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ

第十一條　登錄ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第三章　辯護士ノ權利及義務

第十二條　削除

第十三條　辯護士ハ正當ノ理由ヲ證明スルニ非サレハ裁判所ノ命シタル職務ヲ行フヲ辭スルコトヲ得ス

第十四條　辯護士ハ左ニ掲クル訴訟事件ニ付キ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第一　相手方ノ協議ヲ受ケテ之ヲ贊助シ又ハ委任ヲ受ケタル事件

第二　判事檢事奉職中取扱ヒタル事件

第三　仲裁手續ニ依リ仲裁人ト爲リテ取扱ヒタル事件

第十五條　辯護士ハ係爭權利ヲ買受クルコトヲ得ス

第十六條　辯護士ハ訴訟事件ノ委任ヲ承諾セサルトキハ速ニ其ノ旨ヲ委任者ニ通告スヘシ若通告ヲ怠リタルトキハ之カ爲メ生シタル損害ノ責ニ任ス

第十七條　辯護士ハ所屬地方裁判所又ハ其ノ管內區裁判所所在ノ地ニ事務所ヲ定メ之ヲ所屬地方裁判所檢事局ニ屆出ヘシ

第四章　辯護士會

第十八條　辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所每ニ辯護士會ヲ設立スヘシ

第十九條　辯護士會ハ所屬地方裁判所檢事正ノ監督ヲ受ク

第二十條　辯護士會ニ會長ヲ置ク又副會長ヲ置クコトヲ得

第二十一條　辯護士會ハ每年定期總會ヲ開ク又臨時總會ヲ開クコトヲ得

第二十二條　辯護士會ハ便宜ニ依リ常議員ヲ置クコトヲ得

第二十三條　辯護士會ハ其ノ會則ヲ定メ檢事正ヲ經由シテ司法大臣ノ認可ヲ受クヘシ

辯護士ハ所屬辯護士會ノ會則ヲ遵守スヘシ

第二十四條　辯護士ハ辯護士會ニ加入シタル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

第二十五條　辯護士ハ其ノ所屬地方裁判所管轄外ニ事務所ヲ設ケ職務ヲ行ハムトスルトキハ其ノ職務ヲ行フヘキ地方裁判所所在ノ辯護士會會則ヲ遵守スヘシ

第二十六條　辯護士會會則ニハ會長副會長常議員ノ選擧及其ノ職務、總會、常議員會及其ノ職事ニ關スル規程、辯護士ノ風紀ヲ保持スル規程並ニ謝金及手數料ニ關スル規程其ノ他會務ノ處理ニ必要ナル規程ヲ設クヘシ

第二十七條　會長副會長及常議員選擧ノ結果、總會及常議員會開會ノ日時場所及議題ハ辯護士會ヨリ之ヲ檢事正ニ屆出ヘシ

第二十八條　辯護士會ニ於テハ左ノ事項ノ外議スルコトヲ得ス

第一　法律命令又ハ辯護士會會則ニ規定シタル事項

第二　司法大臣又ハ裁判所ヨリ諮問シタル事項

第三　司法上若ハ辯護士ノ利害ニ關シ司法大臣又ハ裁判所ニ建議スル事項

第二十九條　檢事正ハ辯護士會ノ會場ニ臨席スルコトヲ得又會議ノ結果ヲ報告セシムルコトヲ得

第三十條　辯護士會ノ會議ニシテ法律命令及辯護士會會則ニ違フモノアルトキハ司法大臣ハ其ノ議決ヲ無效トシ又ハ其ノ議事ヲ停止スルコトヲ得

第五章　懲戒

第三十一條　辯護士ニシテ此ノ法律又ハ辯護士會會則ニ違背シタル所爲アルトキハ會長ハ常議員會又ハ總會ノ決議ニ依リ懲戒ヲ求ムル爲檢事正ニ申告スヘシ

檢事正ハ會長ノ申告ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒訴追ヲ檢事長ニ請求スヘシ

第三十二條　辯護士ニ對スル懲戒事件ニ付テハ管轄控訴院ニ於テ懲戒裁判所ヲ開クヘシ

第三十三條　懲戒罰ハ左ノ四種トス

第一　譴責

第二　百圓以下ノ過料

第三　一年以下ノ停職

第四　除名

第三十四條　懲戒處分ニ付テハ判事懲戒法ノ規定ヲ準用ス

附則

第三十五條　現在ノ代言人ハ本法施行ノ日ヨリ六十日以內ニ辯護士名簿ニ登錄ヲ請フトキハ試驗ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得

第三十六條　現在ノ代言人本法施行前ニ委任ヲ受ケタル事件ニ付テハ其ノ判決ニ至ルマテ職務ヲ行フコトヲ得

第三十七條　第十二條ノ規定ハ現在ノ代言人ニ之ヲ適用セス

第三十八條　本法ハ明治二十六年五月一日ヨリ施行ス

明治十三年司法省甲第一號布達代言人規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

●辯護士名簿登錄規則

（明治二十六年四月十日　司法省令第五號）

辯護士名簿登錄規則左ノ通相定ム

第一條　辯護士名簿登錄規則

辯護士名簿ニ登錄ヲ請フ者ハ登錄請求書ニ辯護士法第十條ノ手數料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼付シ所屬地方裁判所檢事局ヲ經

由シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

登錄換ヲ爲ストキモ亦同シ

第二條　地方裁判所檢事局ニ於テ登錄請求書ヲ受理シタルトキハ檢事正ハ辯護士法第二條乃至第六條ノ要件ヲ調査シ意見ヲ付シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第三條　辯護士名簿ノ登錄ハ司法大臣ノ命令ニ因リ地方裁判所檢事局ニ於テ之ヲ爲ス

登錄ノ取消ハ辯護士ノ請求ニ因リ又辯護士死去シタルトキハ辯護士會長ノ申告ニ因リ又辯護士法第五條ニ該當シ又ハ除名セラレタル者アルトキハ受訴裁判所檢事ノ通知ニ因リ地方裁判所檢事局ニ於テ之ヲ爲ス

第四條　辯護士名簿ニハ左ノ諸件ヲ記入ス可シ

一　辯護士ノ族籍氏名年齡

一　登錄ノ年月日

一　辯護士會加入ノ年月日

一　事務所

一　懲戒

第五條　地方裁判所檢事局ニ於テ辯護士名簿ニ登錄ヲ爲シタルトキハ其登錄ノ番號及年月日ヲ司法大臣ニ報告シ且之ヲ本人ニ通知ス可シ

登錄ヲ取消シタルトキモ亦同シ

第六條　辯護士名簿ニ登錄ヲ爲シタルトキ又ハ登錄ヲ取消シタルトキハ司法大臣ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第七條　辯護士會長ハ辯護士會ニ加入シタル者ノ氏名及加入ノ年月日ヲ所屬地方裁判所檢事局ニ屆出ツ可シ

●辯護士試驗規則

（明治二十六年五月十二日司法省令第九號）

辯護士試驗規則左ノ通相定ム

第一條　辯護士試驗ハ毎年一回之ヲ行フ但其期日ハ司法大臣之ヲ定メ三箇月前官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二條　試驗委員長及委員ハ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試驗委員ヲ囑託スルコトアルヘシ

試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條　試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條　試驗委員長及委員ニハ二百圓以內ノ手當ヲ給シ試驗委員附屬ノ書記ニハ三十圓以內ノ手當ヲ給ス

第五條　辯護士法第五條ニ該當スル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第六條　試驗志願者ハ其願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ試驗ヲ受クヘキ裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ之ヲ試驗委員長ニ差出ス可シ

一　履歷書

二　辯護士法第五條第一號但書及ヒ第四號ニ該ル者ハ其復權又ハ債務ノ辨償ヲ終ヘタル證明書

第七條　試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ム可シ但其手數料ハ登記印紙ヲ用ヰ之ヲ願書ニ貼付ス可シ

手數料ハ願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第七條ノ二　試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トシ尙身體檢査ヲ行フ

豫備試驗ニ合格シタル者ニ非サレハ本試驗ヲ行ハス

身體檢査ニ合格セサル者ハ落第トス

第七條ノ三　豫備試驗ハ受驗者ノ本試驗ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トス

第七條ノ四　豫備試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ施行ス

一　論文

二　外國語

外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第七條ノ五　豫備試驗ノ方法ハ試驗委員長之ヲ定ム

第八條　本試驗ハ受驗者ノ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス

筆記試驗ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、國際公法、國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス

口述試驗ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第九條　試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ

第十條　筆記試驗ニ合格シタル者ニ非サレハ口述試驗ヲ行ハス

第十一條　試驗ニ關スル細則ハ試驗擧行毎ニ試驗委員ニ於テ之ヲ定ム可シ

第十二條　試驗委員長ハ試驗ノ成績及ヒ及第者ノ氏名ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十三條　試驗及第者ノ氏名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十四條　試驗及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第十五條　試驗願書及ヒ履歷書ノ書式ハ左ノ如シ

（書式略ス）

●公證人法（明治四十一年四月十四日法律第五十三號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル公證人法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人法

第一章　總則

第一條　公證人ハ當事者其ノ他ノ關係人ノ囑託ニ因リ法律行爲其ノ他私權ニ關スル事實ニ付公正證書ヲ作成シ及私署證書ニ認證ヲ與フルノ權限ヲ有ス

第二條　公證人ノ作成シタル文書ハ本法及他ノ法律ノ定ムル要件ヲ具備スルニ非サレハ公正ノ效力ヲ有セス

第三條　公證人ハ正當ノ理由アルニ非サレハ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス

第四條　公證人ハ法律ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外其ノ取扱ヒタル事件ヲ漏泄スルコトヲ得ス但シ囑託人ノ同意ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第五條　公證人ハ他ノ公務ヲ兼ネ、商業ヲ營ミ又ハ商事會社若ハ營利ヲ目的トスル社團法人ノ代表者若ハ使用人ト爲ルコトヲ得ス但シ司法大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第六條　公證人其ノ職務ノ執行ニ付囑託人其ノ他ノ者ニ損害ヲ加ヘタルトキハ其ノ損害カ公證人ノ故意又ハ重大ナル過失ニ因リテ生シタル場合ニ限リ之ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第七條　公證人ハ囑託人ヨリ手數料、日當及旅費ヲ受ク

公證人ハ前項ニ記載シタルモノヲ除クノ外何等ノ名義ヲ以テスルモ其ノ取扱ヒタル事件ニ關シテ報酬ヲ受クルコトヲ得ス

手數料、日當及旅費ニ關スル規程ハ勅令ヲ以

テ之ヲ定ム

第八條　區裁判所ノ管轄區域內ニ公證人ナキ場合又ハ公證人其ノ職務ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テハ司法大臣ハ其ノ區裁判所ヲシテ管轄區域內ニ於テ公證人ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ公證人ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第九條　本法及他ノ法令中公證人ノ職務ニ關スル規定ハ公證人ノ事務ヲ取扱フ判事又ハ裁判所書記ニ之ヲ準用ス但シ第七條ニ依ル手數料、日當及旅費ハ國庫ノ收入トス

第二章　任免及所屬

第十條　公證人ハ地方裁判所ノ所屬トス

各地方裁判所所屬公證人ノ員數ハ區裁判所ノ管轄區域毎ニ司法大臣之ヲ定ム

第十一條　公證人ハ司法大臣之ヲ任シ及其ノ屬スベキ地方裁判所ヲ指定ス

第十二條　左ノ條件ヲ具備スル者ニ非サレハ公證人ニ任セラルルコトヲ得ス

一　帝國臣民ニシテ成年以上ノ男子タルコト

二　一定ノ試驗ニ合格シタル後六月以上公證人見習トシテ實地修習ヲ爲シタルコト

試驗及實地修習ニ關スル規程ハ司法大臣之ヲ定ム

第十三條　判事、檢事又ハ辯護士タルノ資格ヲ有スル者ハ試驗及實地修習ヲ經スシテ公證人ニ任セラルルコトヲ得

第十四條　左ニ掲クル者ハ公證人ニ任セラルルコトヲ得ス

一　禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者但シ二年以下ノ禁錮ニ處セラレタル者ニシテ刑ノ執行ヲ終リ又ハ其ノ執行ヲ受クルコトナ

キニ至リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

二　破產又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者

三　禁治產者及準禁治產者

四　懲戒ノ處分ニ因リ免官若ハ免職セラレタル者又ハ辯護士法ニ依リ除名セラレタル者ニシテ免官、免職又ハ除名後二年ヲ經過セサル者

第十五條　司法大臣ハ左ノ場合ニ於テ公證人ヲ免スルコトヲ得

一　公證人免職ヲ願出テタルトキ

二　公證人期間內ニ身元保證金又ハ其ノ補充額ヲ納メサルトキ

三　公證人身體又ハ精神ノ衰弱ニ因リ其ノ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキ

前項第三號ノ場合ニ於テハ所屬地方裁判所ヲ管轄スル控訴院ニ於ケル懲戒委員會ノ議決ヲ經ヘシ

第十六條　公證人第十四條第一號乃至第三號ニ該當スルニ至リタルトキハ當然其ノ職ヲ失フ

第三章　職務執行ニ關スル通則

第十七條　公證人ノ職務執行ノ區域ハ其ノ所屬地方裁判所ノ管轄區域ニ依ル

第十八條　公證人ハ司法大臣ノ指定シタル地ニ其ノ役場ヲ設クヘシ

公證人ハ役場ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ要ス但シ事件ノ性質カ之ヲ許ササル場合又ハ法令ニ別段ノ定アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

公證人ハ其ノ役場內ニ住居スヘシ但シ司法大臣ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十九條　公證人ハ任命ノ辭令書ヲ受ケタル日ヨリ十五日以內ニ所屬地方裁判所ニ身元保證金ヲ納ムヘシ

身元保證金ノ額ハ土地ノ情況ニ從ヒ三百圓以

上千圓以下ノ範圍内ニ於テ司法大臣之ヲ定ム」

身元保證金ノ額ニ不足ヲ生シ補充ノ命令ヲ受ケタルトキハ其ノ命令ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ其ノ不足額ヲ補充スヘシ

公證人身元保證金ヲ納メサル間ハ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第二十條　身元保證金ヲ還付スヘキ場合ニ於テハ其ノ身元保證金ノ上ニ權利ヲ有スル者ニ對シ六月ヲ下ラサル期間内ニ申出ツヘキ旨ヲ公告スヘシ

身元保證金ハ前項ノ期間ヲ經過スルニ非サレハ之ヲ還付セス

身元保證金ハ他ノ公課及債權ニ先チテ之ヲ第一項ノ公告費用ニ充ツ

第二十一條　公證人ハ其ノ職印ノ印鑑ニ氏名ヲ自署シ之ヲ所屬地方裁判所ニ差出スヘシ

公證人前項ノ印鑑ヲ差出ササル間ハ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

第二十二條　公證人ハ左ノ場合ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ得ス

一　囑託人、其ノ代理人又ハ囑託セラレタル事項ニ付利害ノ關係ヲ有スル者ノ配偶者、四親等内ノ親族又ハ同居ノ戸主若ハ家族タルトキ親族關係カ止ミタル後亦同シ

二　囑託人又ハ其ノ代理人ノ法定代理人又ハ保佐人タルトキ

三　囑託セラレタル事項ニ付利害ノ關係ヲ有スルトキ

四　囑託セラレタル事項ニ付代理人若ハ輔佐人タルトキ又ハ代理人若ハ輔佐人タリシトキ

第二十三條　公證人職務上署名スルトキハ其ノ職名、所屬及役場所在地ヲ記載スヘシ

第二十四條　公證人ハ所屬地方裁判所長ノ認可

ヲ受ケテ筆生ヲ置キ執務ノ補助ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ認可ハ必要ナル場合ニ於テハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第二十五條　公證人ノ作成シタル證書ノ原本、其ノ附屬書類及法令ニ依リ公證人ノ調製シタル帳簿ハ事變ヲ避クル爲ニスル場合ヲ除クノ外之ヲ役場外ニ持出スコトヲ得ス但シ裁判所又ハ豫審判事ノ命令又ハ囑託アリタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ書類ノ保存及廢毀ニ關スル規程ハ司法大臣之ヲ定ム

第四章　證書ノ作成

第二十六條　公證人ハ法令ニ違反シタル事項、無效ノ法律行爲及無能力ニ因リテ取消スコトヲ得ヘキ法律行爲ニ付證書ヲ作成スルコトヲ得ス

第二十七條　公證人ハ日本語ヲ用ウル證書ニ非サレハ之ヲ作成スルコトヲ得ス

第二十八條　公證人證書ヲ作成スルニハ囑託人ノ氏名ヲ知リ且之ト面識アルコトヲ要ス

公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス又ハ之ト面識ナキトキハ其ノ本籍地若ハ寄留地ノ市區町村長ノ作成シタル印鑑證明書ヲ提出セシメ又ハ氏名ヲ知リ且面識アル證人二人ニ依リ其ノ人違ナキコトヲ證明セシムルコトヲ要ス但シ囑託人外國人ナルトキハ警察官吏又ハ帝國ニ駐在スル本國領事ノ證明書ヲ以テ印鑑證明書ニ代フルコトヲ得

急迫ナル場合ニ於テ公證人法律行爲ニ非サル事實ニ付證書ヲ作成スルトキハ前項ノ手續ハ證書ヲ作成シタル後三日内ニ證書ノ作成ニ關スル規定ニ依リ之ヲ爲スコトヲ得

前項ノ手續ヲ爲シタルトキハ證書ハ急迫ナル

場合ニ非サルカ爲其ノ效力ヲ妨ケラルルコトナシ

第三十四條第三項ノ規定ハ第二項ノ證人ニ之ヲ準用ス

第二十九條　囑託人日本語ヲ解セサル場合又ハ聾者若ハ啞者其ノ他言語ヲ發スルコト能ハサル者ニシテ文字ヲ解セサル場合ニ於テ公證人證書ヲ作成スルニハ通事ヲ立會ハシムルコトヲ要ス

第三十條　囑託人盲者ナル場合又ハ文字ヲ解セサル場合ニ於テ公證人證書ヲ作成スルニハ立會人ヲ立會ハシムルコトヲ要ス

前項ノ規定ハ囑託人立會人ヲ立會ハシムルコトヲ請求シタル場合ニ之ヲ準用ス

第三十一條　代理人ニ依リ囑託セラレタル場合ニ於テハ前三條ノ規定ハ其ノ代理人ニ之ヲ適用ス

第三十二條　代理人ニ依リ囑託セラレタル場合ニ於テ公證人證書ヲ作成スルニハ其ノ代理人ノ權限ヲ證スヘキ證書ヲ提出セシメ其ノ權限ヲ證明セシムルコトヲ要ス

前項ノ證書カ認證ヲ受ケサル私署證書ナルトキハ其ノ證書ノ外其ノ署名者ノ本籍地又ハ寄留地ノ市區町村長ノ作成シタル印鑑證明書ヲ提出セシメ證書ノ眞正ナルコトヲ證明セシムルコトヲ要ス但シ其ノ署名者外國人ナルトキハ第二十八條第二項但書ノ規定ヲ準用ス

證書ノ作成ニ關スル規定ニ依リ代理又ハ其ノ方式ノ欠缺ヲ追完シタルトキハ證書ハ其ノ欠缺アリタルカ爲效力ヲ妨ケラルルコトナシ

第三十三條　第三者ノ許可又ハ同意ヲ要スヘキ法律行爲ニ付公證人證書ヲ作成スルニハ其ノ許可又ハ同意アリタルコトヲ證スヘキ證書ヲ提出セシメ其ノ許可又ハ同意ヲ證明セシムル

コトヲ要ス

前條第二項及第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第三十四條　通事及立會人ハ囑託人又ハ其ノ代理人之ヲ選定スルコトヲ要ス

立會人ハ通事ヲ兼ヌルコトヲ得

左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

一　未成年者

二　第十四條ニ掲ケタル者

三　自ラ署名スルコト能ハサル者

四　囑託事項ニ付利害ノ關係ヲ有スル者

五　囑託事項ニ付代理人若ハ輔佐人タル者又ハ代理人若ハ輔佐人タリシ者

六　公證人又ハ囑託人若ハ其ノ代理人ノ配偶者、四親等內ノ親族、同居ノ戶主若ハ家族、法定代理人、保佐人、雇人又ハ同居人

七　公證人ノ輩生

第三十五條　公證人證書ヲ作成スルニハ其ノ聽取シタル陳述、其ノ目擊シタル狀況其ノ他自ラ實驗シタル事實ヲ錄取シ且其ノ實驗ノ方法ヲ記載シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三十六條　公證人ノ作成スル證書ニハ其ノ本旨ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

一　證書ノ番號

二　囑託人ノ住所、職業、氏名及年齡若法人ナルトキハ其ノ名稱及事務所

三　代理人ニ依リ囑託セラレタルトキハ其ノ旨及其ノ代理人ノ權限ヲ證スヘキ證書ヲ提出セシメ其ノ權限ヲ證明セシメタルコト竝其ノ代理人ノ住所、職業、氏名及年齡

四　囑託人又ハ其ノ代理人ノ氏名ヲ知リ且之ト面識アルトキハ其ノ旨

五　第三者ノ許可又ハ同意アリタルコトヲ證

スヘキ證書ヲ提出セシメ其ノ許可又ハ同意ヲ證明セシメタルトキハ其ノ旨及其ノ事由竝其ノ第三者ノ住所、職業、氏名及年齢若法人ナルトキハ其ノ名稱及事務所

六　市區町村長ノ作成シタル印鑑證明書又ハ警察官吏若ハ領事ノ證明書ヲ提出セシメ人違ナキコト又ハ證書ノ眞正ナルコトヲ證明セシメタルトキハ其ノ旨及其ノ事由

七　氏名ヲ知リ且面識アル證人ニ依リ人違ナキコトヲ證明セシメタルトキハ其ノ旨及其ノ事由竝其ノ證人ノ住所、職業、氏名及年齢

八　急迫ナル場合ニ於テ人違ナキコトヲ證明セシメサリシトキハ其ノ旨

九　通事又ハ立會人ヲ立會ハシメタルトキハ其ノ旨及其ノ事由竝其ノ通事又ハ立會人ノ住所、職業、氏名及年齢

十　作成ノ年月日及場所

第三十七條　公證人證書ヲ作成スルニハ普通平易ノ語ヲ用ヰ字畫ヲ明瞭ナラシムヘシ

接續スヘキ字行ニ餘白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續セシムヘシ

數量、年月日及番號ヲ記載スルニハ壹貳參拾ノ字ヲ用ウヘシ

第三十八條　證書ノ文字ハ之ヲ改竄スルコトヲ得ス

證書ニ文字ヲ挿入スルトキハ其ノ文字及其ノ箇所ヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ記載シ公證人、囑託人又ハ其ノ代理人及立會人之ニ捺印スルコトヲ要ス

證書ノ文字ヲ削除スルトキハ其ノ文字ハ尚明ニ讀得ヘキ爲字體ヲ存シ削除シタル字數及箇所ヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ記載シ公證人、囑託人又ハ其ノ代理人及立會人之ニ捺印スルコ

トヲ要ス

前三項ノ規定ニ違反シテ爲シタル訂正ハ其ノ效力ヲ有セス

第三十九條　公證人ハ其ノ作成シタル證書ヲ列席者ニ讀聞カセ又ハ閲覽セシメ囑託人又ハ其ノ代理人ノ承認ヲ得且其ノ旨ヲ證書ニ記載スルコトヲ要ス

通事ヲ立會ハシメタル場合ニ於テハ前項ノ外通事ヲシテ證書ノ趣旨ヲ通譯セシメ且其ノ旨ヲ證書ニ記載スルコトヲ要ス

前二項ノ記載ヲ爲シタルトキハ公證人及列席者各自證書ニ署名捺印スルコトヲ要ス

列席者ニシテ署名スルコト能ハサル者アルトキハ其ノ旨ヲ證書ニ記載シ公證人及立會人之ニ捺印スルコトヲ要ス

證書數葉ニ渉ルトキハ公證人、囑託人又ハ其ノ代理人及立會人ハ每葉ノ綴目ニ契印ヲ爲スコトヲ要ス

證書ハ公證人、囑託人若ハ其ノ代理人又ハ立會人ノ契印ニ依リ其ノ全部ノ連綴明白ナル場合ニ於テハ前項ニ違反シタルカ爲其ノ效力ヲ妨ケラルルコトナシ

第四十條　公證人ノ作成スル證書ニ他ノ書面ヲ引用シ且之ヲ其ノ證書ニ添附スルトキハ公證人、囑託人又ハ其ノ代理人及立會人其ノ證書ト添附書面トノ綴目ニ契印ヲ爲スコトヲ要ス」

前三條ノ規定ハ前項ノ添附書面ニ之ヲ準用ス」

前二項ニ依ル添附書面ハ公證人ノ作成シタル證書ノ一部ト看做ス

第四十一條　代理人ノ權限ヲ證スヘキ證書、市區町村長、警察官吏又ハ領事ノ證明書、第三者ノ許可又ハ同意ヲ證スヘキ證書其ノ他ノ附屬書類ハ公證人ノ作成シタル證書ニ之ヲ連綴スヘシ

公證人、囑託人又ハ其ノ代理人及立會人ハ證書ト其ノ附屬書類トノ綴目及附屬書類相互ノ綴目ニ契印ヲ爲スヘシ

第四十二條　證書ノ原本滅失シタルトキハ公證人ハ既ニ交付シタル證書ノ正本又ハ謄本ヲ徵シ所屬地方裁判所長ノ認可ヲ受ケ滅失シタル證書ニ代ヘテ之ヲ保存スルコトヲ要ス

前項ノ證書ニハ所屬地方裁判所長ノ認可ヲ受ケ滅失シタル證書ニ代ヘテ之ヲ保存スル旨及其ノ認可ノ年月日ヲ記載シ公證人之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

第四十三條　公證人ハ囑託人ヲシテ印紙稅法ニ依リ證書ノ原本ニ印紙ヲ貼用セシムヘシ

第四十四條　囑託人、其ノ承繼人又ハ證書ノ趣旨ニ付法律上利害ノ關係ヲ有スルコトヲ證明シタル者ハ證書ノ原本ノ閲覽ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條第一項、第二項及第五項、第三十一條並第三十二條第一項及第二項ノ規定ハ前項ニ依リ公證人證書ノ原本ヲ閲覽セシムヘキ場合ニ之ヲ準用ス

公證人囑託人ノ承繼人ニ證書ノ原本ヲ閲覽セシムヘキ場合ニ於テハ承繼人タルコトヲ證スヘキ證書ヲ提出セシメ其ノ承繼人タルコトヲ證明セシムヘシ

第三十二條第二項ノ規定ハ前項ニ依リ提出セシムヘキ證書ニ之ヲ準用ス

檢事ハ何時ニテモ證書ノ原本ノ閲覽ヲ請求スルコトヲ得

第四十五條　公證人ハ證書原簿ヲ調製シ記入前其ノ所屬地方裁判所長ノ契印ヲ請フヘシ

地方裁判所長ハ其ノ枚數ヲ表紙ノ裏面ニ記載シ職氏名ヲ署シ職印ヲ押捺シ每葉ノ綴目ニ職印ヲ以テ契印ヲ爲スヘシ

第四十六條　證書原簿ニハ證書ノ作成每ニ進行ノ順序ヲ逐ヒ左ノ事項ヲ記入スヘシ

一　證書ノ番號及種類

二　囑託人ノ住所及氏名若法人ナルトキハ其ノ名稱及事務所

三　作成ノ年月日

第三十七條及第三十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

前二項ノ規定ハ證書ノ作成ヲ記入スヘキ帳簿ニ關シ法令ニ別段ノ定アル場合ニ之ヲ適用セス

第四十七條　囑託人又ハ其ノ承繼人ハ證書ノ正本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條第一項、第二項及第五項、第三十一條、第三十二條第一項及第二項並第四十四條第三項及第四項ノ規定ハ前項ニ依リ公證人證書ノ正本ヲ作成スヘキ場合ニ之ヲ準用ス

第四十八條　證書ノ正本ニハ左ノ事項ヲ記載シ公證人之ニ署名捺印スルコトヲ要ス

一　證書ノ全文

二　正本タルコト

三　交付ヲ請求シタル者ノ氏名

四　作成ノ年月日及場所

前項ノ規定ニ違反スルモノハ證書ノ正本タルノ效力ヲ有セス

第四十九條　數事件ヲ列記スル證書又ハ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ニ付テハ有用ノ部分及證書ノ方式ニ關スル記載ヲ抄錄シテ其ノ正本ヲ作成スルコトヲ得

前項ノ正本ニハ抄錄正本タルコトヲ記載シ前條第一項第二號ノ記載ニ代フルコトヲ要ス

第五十條　公證人證書ノ正本ヲ交付シタルトキハ其ノ證書ノ末尾ニ囑託人又ハ其ノ承繼人何某ノ爲正本ヲ交付シタル旨及其ノ交付ノ年月

日ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

第五十一條　囑託人、其ノ承繼人又ハ證書ノ趣旨ニ付法律上利害ノ關係ヲ有スルコトヲ證明シタル者ハ證書又ハ其ノ附屬書類ノ謄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條第一項、第二項及第五項、第三十一條、第三十二條第一項及第二項並第四十四條第三項及第四項ノ規定ハ前項ニ依リ公證人證書ノ謄本ヲ作成スヘキ場合ニ之ヲ準用ス

第五十二條　證書ノ謄本ニハ左ノ事項ヲ記載シ公證人之ニ署名捺印スヘシ

一　證書ノ全文

二　謄本タルコト

三　作成ノ年月日及場所

第五十三條　證書ノ謄本ハ其ノ一部ニ付之ヲ作成スルコトヲ得

前項ノ謄本ニハ抄錄謄本タルコトヲ記載スヘシ

第五十四條　前二條ノ規定ハ證書ノ附屬書類ノ謄本ノ作成ニ之ヲ準用ス

第五十五條　證書又ハ其ノ附屬書類ノ謄本ヲ請求スル者ハ之ニ記載スヘキ事項ヲ自ラ記載シ公證人ノ署名捺印ノミヲ請求スルコトヲ得

公證人前項ノ謄本ニ署名捺印シタルトキハ其ノ謄本ハ公證人自ラ之ヲ作成シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第五十六條　證書ノ正本若ハ謄本又ハ其ノ附屬書類ノ謄本數葉ニ渉ルトキハ公證人ハ每葉ノ綴目ニ契印ヲ爲スヘシ

第三十七條及第三十八條ノ規定ハ證書ノ正本及謄本並其ノ附屬書類ノ謄本ノ作成ニ之ヲ準用ス

第五十七條　第十八條第二項ノ規定ハ公　人遺言書ヲ作成スル場合ニ、第二十八條乃至第三

十二條ノ規定ハ公證人拒絕證書ヲ作成スル場合ニ之ヲ適用セス

第五章　認證

第五十八條　公證人私署證書ニ認證ヲ與フルニハ當事者其ノ面前ニ於テ證書ニ署名若ハ捺印シタルトキ又ハ證書ノ署名若ハ捺印ヲ自認シタルトキ其ノ旨ヲ記載シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

私署證書ノ謄本ニ認證ヲ與フルニハ證書ト對照シ其ノ符合スルコトヲ認メタルトキ其ノ旨ヲ記載シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

私署證書ニ文字ノ挿入、削除、改竄、欄外ノ記載其ノ他ノ訂正アルトキ又ハ破損若ハ外見上著ク疑フヘキ點アルトキハ其ノ狀況ヲ認證文ニ記載スルコトヲ要ス

第五十九條　認證ヲ與フヘキ證書ニハ登簿番號、認證ノ年月日及其ノ場所ヲ記載シ公證人及立會人之ニ署名捺印シ且其ノ證書ト認證簿トニ契印ヲ爲スコトヲ要ス

第六十條　第二十六條乃至第三十四條、第三十七條、第三十八條並第三十九條第五項及第六項ノ規定ハ私署證書ニ認證ヲ與フル場合ニ之ヲ準用ス

第六十一條　公證人ハ認證簿ヲ調製スヘシ

第四十五條ノ規定ハ認證簿ノ調製ニ之ヲ準用ス

第六十二條　認證簿ニハ認證ヲ與フル每ニ進行ノ順序ヲ逐ヒ左ノ事項ヲ記入スヘシ

一　登簿番號

二　囑託人ノ住所及氏名若法人ナルトキハ其ノ名稱及事務所

三　證書ノ種類及署名捺印者

四　認證ノ方法

五　立會人ノ住所及氏名

六　認證ノ年月日

第三十七條及第三十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六章　代理兼務及受繼

第六十三條　公證人疾病其ノ他已ムコトヲ得サル事由ニ因リ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ同一區裁判所ノ管轄區域又ハ之ニ鄰接スル區裁判所ノ管轄區域内ノ公證人ニ代理ヲ囑託スルコトヲ得

公證人前項ニ依リ代理ヲ囑託シタルトキハ遲滯ナク其ノ旨ヲ所屬地方裁判所長ニ屆出ツヘシ其ノ代理ヲ解キタルトキ亦同シ

第六十四條　公證人前條第一項ニ依リ代理ヲ囑託セス又ハ之ヲ囑託スルコト能ハサルトキハ所屬地方裁判所長ハ同一區裁判所ノ管轄區域又ハ之ニ鄰接スル區裁判所ノ管轄區域内ノ公證人ニ代理ヲ命スルコトヲ得

公證人其ノ職務ヲ行フコトヲ得ルニ至リタルトキハ地方裁判所長ハ前項ノ代理ヲ解クヘシ

第六十五條　公證人ノ代理者前二條ニ依リ其ノ職務ヲ行フノ役場ハ代理セラルル公證人ノ役場トス

公證人ノ代理者職務上署名スルトキハ代理セラルル公證人ノ職氏名、所屬、役場所在地及其ノ代理者タルコトヲ記載スヘシ

第二十二條ノ規定ハ代理セラルル公證人ノ外其ノ代理者ニモ之ヲ適用ス

第六十六條　公證人ノ死亡、免職、失職又ハ轉屬ノ場合ニ於テ所屬地方裁判所長必要ト認ムルトキハ其ノ指定シタル官吏ヲシテ遲滯ナク役場ノ書類ニ封印ヲ爲サシムヘシ

第六十七條　公證人ノ死亡、免職、失職又ハ轉屬ノ場合ニ於テ直ニ後任者ノ任命セラレサルトキハ所屬地方裁判所長ハ同一區裁判所ノ管轄區域又ハ之ニ鄰接スル區裁判所ノ管轄區域内ノ公證人ニ後任者職務上署名スルトキハ兼務者タルコトヲ記載スヘシ

前任者又ハ兼務者ノ作成シタル證書ニ依リ後任者カ其ノ正本又ハ謄本ヲ作成スル場合ニ於テ署名スルトキハ後任者タルコトヲ記載スヘシ

第六十八條　公證人ノ死亡、免職、失職又ハ轉屬ノ場合ニ於テ直ニ後任者ノ任命セラレサルトキハ地方裁判所長ハ前項ノ兼務ヲ解クヘシ

死亡其ノ他ノ事由ニ因リ書類ノ授受ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ後任者又ハ兼務者ハ所屬地方裁判所長ノ指定シタル官吏ノ立會ヲ以テ書類ヲ受取ルヘシ

第六十九條　前條ノ規定ハ兼務者カ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡スヘキ場合ニ之ヲ準用ス

第七十條　兼務者職務上署名スルトキハ兼務者タルコトヲ記載スヘシ

前任者又ハ兼務者ノ作成シタル證書ニ依リ後任者カ其ノ正本又ハ謄本ヲ作成スル場合ニ於テ署名スルトキハ後任者タルコトヲ記載スヘシ

第七十一條　公證人ノ死亡、免職、失職又ハ轉屬ノ場合ニ於テ定員ノ改正ニ因リ後任者ヲ要セサルトキハ司法大臣ハ同一區裁判所ノ管轄區域内ノ公證人ニ書類ノ引繼ヲ命スヘシ

第六十八條及前條第二項ノ規定ハ前項ニ依リ書類ノ引繼ヲ命セラレタル公證人ニ之ヲ準用ス

第七十二條　第六十六條、第六十七條、第六十八條第三項及第七十條第一項ノ規定ハ公證人ノ停職ノ場合ニ之ヲ準用ス

兼務者前項ニ依リ其ノ職務ヲ行フノ役場ハ停

職者ノ役場トス

第七十三條　第六十八條及第六十九條ノ規定ハ區裁判所カ第八條ニ依リ公證人ノ職務ヲ行フ場合ニ之ヲ準用ス

第七章　監督及懲戒

第七十四條　公證人ハ所屬地方裁判所長ノ監督ヲ受ク

地方裁判所長ハ區裁判所ノ一人ノ判事又ハ監督判事ヲシテ其ノ管轄區域內ノ公證人ニ對スル監督事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七十五條　司法大臣及控訴院長ハ司法行政ノ監督ニ關スル規定ニ準シ公證人ヲ監督ス

第七十六條　前二條ノ監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

一　公證人ノ不適當ニ取扱ヒタル職務ニ付其ノ注意ヲ促シ及適當ニ其ノ職務ヲ取扱フヘキコトヲ之ニ訓令スルコト

二　職務ノ內外ヲ問ハス公證人ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付之ニ諭告スルコト但シ諭告ヲ爲ス前其ノ公證人ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第七十七條　監督官ハ公證人ノ保存スル書類ヲ檢閲シ又ハ其ノ指定シタル官吏ヲシテ之ヲ檢閲セシムルコトヲ得

第七十八條　囑託人又ハ利害關係人ハ公證人ノ事務取扱ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

前項ノ抗告ハ本章ニ揭ケタル監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第七十九條　公證人職務上ノ義務ニ違反シタルトキ又ハ品位ヲ失墜スヘキ行爲アリタルトキハ懲戒ニ付ス

第八十條　懲戒ハ左ノ五種トス

一　譴責

二　千圓以下ノ過料

三　一年以下ノ停職

四　轉屬

五　免職

第八十一條　過料、停職、轉屬及免職ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ司法大臣之ヲ行フ

譴責ハ司法大臣之ヲ行フ

第八十二條　各控訴院ニ懲戒委員會ヲ設ク

懲戒委員會ハ之ヲ設置シタル控訴院ノ管轄區域內ノ地方裁判所所屬ノ公證人ニ對スル懲戒ヲ議決ス

懲戒委員會ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八十三條　公證人ノ懲戒手續ト刑事裁判手續トノ關係及其ノ職務停止ニ付テハ判事懲戒法ノ規定ヲ準用ス

公證人ノ停職ニ關スル規定ハ其ノ職務停止ノ場合ニ之ヲ準用ス

第八十四條　過料ヲ完納セサルトキハ檢事ノ命令ヲ以テ之ヲ執行ス

前項ノ執行ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス

公證人ノ納メタル身元保證金ハ第二十條第三項ノ場合ヲ除クノ外他ノ公課及債權ニ先チテ之ヲ過料ニ充ツ

附則

第八十五條　本法ニ於テ市區町村長ト稱スルハ之ヲ置カサル地ニ在リテハ其ノ職務ヲ行フ吏員ヲ謂フ

第八十六條　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治四十二年勅令第百八十九號ヲ以テ同年八月十六日ヨリ施行ス）

第八十七條　公證人規則ハ之ヲ廢止ス

第八十八條　本法施行ノ際公證人タル者ハ別ニ任命ノ辭令書ヲ用ヰス本法ニ依ル公證人トシ

其ノ役場所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ所屬トス

第八十九條　公證人規則ニ依リ公證人ノ設ケタル役場ハ本法ニ依ル役場トス

第九十條　公證人規則ニ依リ差入レタル身元保證金ハ本法ニ依リ納メタル身元保證金トス

第九十一條　公證人規則ニ依リ囑託セラレタル代理者又ハ命セラレタル兼任者ハ本法ニ依ル代理者又ハ兼務者トス

第九十二條　本法施行前ニ著手シタル公證人ノ職務上ノ行爲ハ本法ニ依リ之ヲ完結ス

第九十三條　本法施行前ニ著手シタル公證人規則第五十八條、第五十九條及第六十一條ノ手續ハ本法ニ依リ之ヲ完結ス

第九十四條　本法施行前ニ公證人ノ事務取扱ニ對シテ爲シタル抗告ハ公證人規則ニ依リ之ヲ完結ス

第九十五條　本法施行前ニ爲シタル公證人ノ行爲ニシテ公證人規則ニ違反スルモノハ本法ニ依リ之ヲ懲戒ニ付ス但シ本法施行前ニ開始シタル懲罰手續ハ公證人規則ニ依リ之ヲ完結ス

●公證人法施行細則

（明治四十二年七月十二日司法省令第十四號）

公證人法施行細則左ノ通相定ム

公證人法施行細則

第一條　公證人司法大臣ノ指定シタル地ニ其ノ役場ヲ設ケムトスルトキハ其ノ位置及建物ノ構造ヲ記載シタル書面ヲ添ヘ所屬地方裁判所長ノ認可ヲ受クヘシ

役場ヲ設ケタルトキハ遲滯ナク司法大臣ニ届出ツヘシ

第二條　前條ノ規定ハ役場ヲ移轉スル場合ニ之ヲ準用ス

第三條　公證人ハ其ノ役場ニ公證人某役場ト記載シタル表札ヲ掲クヘシ

第四條　公證人ノ納ムヘキ身元保證金ノ額ハ左ノ區別ニ從フ

東京市及大阪市ニ役場ヲ設クル者　金千圓

人口十萬以上ノ地ニ役場ヲ設クル者　金七百圓

人口三萬以上ノ地ニ役場ヲ設クル者　金五百圓

其ノ他ノ地ニ役場ヲ設クル者　金三百圓

第五條　公證人ノ納ムヘキ身元保證金ハ現金ニ代ヘ國債證券、日本勸業銀行發行勸業債券及貯蓄債券、日本興業銀行發行債券又ハ日本銀行株券ヲ以テ之ヲ納付スルコトヲ得

第六條　公證人期間内ニ身元保證金又ハ其ノ補充額ヲ納メサルトキハ所屬地方裁判所長ハ速ニ其ノ旨ヲ司法大臣ニ具申スヘシ

第七條　公證人法第二十條第二項ノ公告ハ地方裁判所之ヲ爲ス

前項ノ公告ハ官報ニ之ヲ爲シ且新聞紙上ニ少クトモ二回之ヲ爲スヘシ

第八條　公證人ノ職印ハ方六分トシ公證人何某ト彫刻スヘシ

第九條　公證人ノ作ルヘキ證書其ノ他ノ書面ノ用紙ハ某地方裁判所管内公證人役場ト刻シタル强靭ナル美濃罫紙ヲ用ウヘシ

第十條　公證人法ニ依リ提出スヘキ印鑑證明書ニハ氏名、住所ノ外年齡ノ記載アルコトヲ要ス

第十一條　公證人法律行爲ニ付證書ヲ作成シ又ハ認證ヲ與フル場合ニ於テ其ノ法律行爲ノ有效ナルヤ否、當事者カ相當ノ考慮ヲ爲シタル

ヤ否及之ヲ爲スノ能力ヲ欠缺セサルヤ否ニ付疑アルトキハ關係人ニ注意ヲ爲シ且之ヲシテ必要ナル說明ヲ爲サシムヘシ

第十二條　公證人法律行爲ニ非サル事實ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於テ其ノ事實ニ因リ影響ヲ受クヘキ私權ノ關係ニ付疑アルトキハ關係人ニ注意ヲ爲シ且之ヲシテ必要ナル說明ヲ爲サシムヘシ

第十三條　法律行爲ニ付テノ證書ノ再度ノ正本ノ交付ヲ請求スル者アル場合ニ於テ其ノ正本ヲ要スル事由ニ付疑アルトキハ公證人ハ其ノ者ヲシテ其ノ事由ヲ證明セシムヘシ

第十四條　公證人囑託ヲ拒ミタル場合ニ於テ囑託人ノ請求アルトキハ其ノ理由書ヲ交付スヘシ

第十五條　公證人役場ニハ證書原簿、認證簿及確定日附簿ノ外左ノ帳簿ヲ備フヘシ

一　受附簿
二　拒絕證書謄本綴込帳

第十六條　證書原簿、認證簿及受附簿ハ附錄第一號乃至第三號雛形ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第十七條　公證人囑託ヲ受ケタルトキハ受附簿ニ受附月日、受附番號、件名及囑託人ノ氏名、住所ヲ記載シ職務ノ完結後證書ノ番號又ハ登簿番號並手數料、日當及旅費ノ額ヲ記入スヘシ

第十八條　受附番號ハ一曆年毎ニ之ヲ更新スヘシ

第十九條　同時ニ數箇ノ囑託ヲ爲ス場合ニ於テハ印鑑證明書又ハ警察官吏若ハ領事ノ證明書ハ一通ヲ提出スルヲ以テ足ル

前項ノ場合ニ於テハ受附番號ノ最少キモノニ其ノ證明書ヲ連綴シ其ノ他ノ囑託ニハ其ノ旨ヲ記載シタル書面ヲ作リ之ヲ連綴スヘシ

第二十條　證書原簿及受附簿ニ囑託人ノ氏名、住所ヲ記載スル場合ニ於テ囑託人多數ナルトキハ當事者雙方各一人ノミノ氏名、住所及他ノ人員ヲ記載スルヲ以テ足ル

第二十一條　證書ノ原本ハ番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ編綴スヘシ

囑託ニ關シ提出シタル書類ニシテ原本ニ連綴スヘカラサルモノハ之ニ表紙ヲ附シ件名及受附番號ヲ記載シ受附番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ編綴スヘシ

第二十二條　公證人ハ其ノ役場ニ附屬スル倉庫又ハ堅牢ナル建物內ニ書類ヲ保存スヘシ

第二十三條　公證人法第六十八條、第六十九條及第七十一條乃至第七十三條ニ依リ書類ノ授受ヲ爲ス場合ニ於テハ目錄ヲ作リ其ノ末尾ニ授受ノ事由及年月日ヲ記載シ授受者及立會官吏之ニ署名捺印スヘシ

前項ノ目錄ハ作成ノ日ヨリ一箇月內ニ其ノ謄本ヲ所屬地方裁判所ニ差出スヘシ

第二十四條　公證人法第六十七條第一項ノ兼務者ハ自己ノ役場ニ於テ前任者ノ事務ヲ取扱フコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ速ニ司法大臣ニ其ノ旨ヲ屆出ツヘシ

第二十五條　代理者又ハ公證人法第七十二條ノ兼務者ハ其ノ職務ヲ行フ役場ノ見易キ場所ニ代理者某又ハ兼務者某ナルコトヲ揭示スヘシ

第二十六條　後任者又ハ公證人法第六十七條第一項ノ兼務者ハ其ノ職務ヲ行フ役場ノ見易キ場所ニ公證人某ノ後任者又ハ公證人某ノ取扱ヒタル事務ニ付テノ兼務者ナルコトヲ揭示スヘシ但シ後任者ノ爲スヘキ揭示ノ期間ハ一年トス

第二十七條　後任者ノ作成スル文書ノ番號ハ前

任者又ハ兼務者ノ作成シタル文書ノ番號ノ順序ヲ追ヒテ之ヲ記載スヘシ

第二十八條　地方裁判所長ハ公證人名簿ヲ備ヘ之ニ所屬公證人ノ住所、族稱、氏名、年齢及役場所在地ヲ登錄スヘシ

第二十九條　公證人ノ死亡又ハ失職ノ場合ニ於テハ所屬地方裁判所長ハ速ニ其ノ旨ヲ司法大臣ニ具申スヘシ

第三十條　公證人司法大臣ニ書面ヲ提出スル場合ニ於テハ所屬地方裁判所長ヲ經由スヘシ但シ急ヲ要スルモノハ此ノ限ニ在ラス

前項但書ノ場合ニ於テハ同時ニ地方裁判所長ニ其ノ旨ヲ屆出ツヘシ

第三十一條　公證人事務取扱ヲ關シ疑義ヲ生シタルトキハ司法大臣ニ稟伺スルコトヲ得

第三十二條　收入印紙ヲ以テ手數料、日當及旅費ヲ區裁判所ニ納付スル場合ニ於テハ納付書ニ其ノ收入印紙ヲ貼附シテ之ヲ差出スヘシ

附　則

本令ハ公證人法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

公證人法第三十六條第一號ニ依リ記載スヘキ證書ノ番號ハ公證人規則ニ依リ附シタル番號ノ順序ヲ追ヒテ之ヲ記載スヘシ

（附錄樣式略ス）

●公證人手數料規則

（明治四十二年六月二十九日　勅令第百七十四號）

朕公證人手數料規則ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

公證人手數料規則

第一條　公證人ノ受クヘキ手數料、日當及旅費ハ本令ノ定ムル所ニ依ル

第二條　法律行爲ニ付テノ證書作成ノ手數料ハ本令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外左ノ區別ニ從フ

法律行爲ノ目的ノ價額百圓迄　一圓

同　二百五十圓迄　一圓二十五錢

同　五百圓迄　一圓五十錢

同　七百五十圓迄　一圓七十五錢

同　千圓迄　二圓

同　二千五百圓迄　二圓五十錢

同　五千圓迄　三圓

同五千圓ヲ超過スルトキハ五萬圓迄ハ五千圓毎ニ五十錢ヲ加フ但シ五千圓ニ滿タサルモ之ヲ五千圓トス

同五萬圓ヲ超過スルトキハ一萬圓毎ニ五十錢ヲ加フ但シ一萬圓ニ滿タサルモ之ヲ一萬圓トス

第三條　法律行爲ノ目的ノ價額ハ公證人カ證書ノ作成ニ著手シタル時ノ價額ニ依ル

第四條　當事者雙方ノ囑託ニ因リ證書ヲ作成スル場合ニ於テハ法律行爲ノ目的ノ價額ハ各給付ノ價額ヲ合算シタル額ニ依ル但シ當事者ノ一方ノ給付ノミカ金錢ヲ目的トスルモノナルトキハ其ノ二倍ノ額ニ依ル

第五條　當事者ノ一方ノ囑託ニ因リ證書ヲ作成スル場合ニ於テハ囑託人ノ給付ノ價額ヲ以テ法律行爲ノ目的ノ價額トス但シ相手方ノ給付カ金錢ヲ目的トスルモノナルトキハ其ノ額ニ依ル

第六條　主タル法律行爲ト共ニ附隨ノ法律行爲ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於テハ主タル法律行爲ニ依リ手數料ヲ算定ス

第七條　債權ノ擔保ノ價額ハ其ノ目的ノ價額ト債權ノ額トヲ比較シ其ノ少キ額ニ依ル

擔保ノ移轉ヲ目的トスル法律行爲ニ付テハ擔

保ノ價額ト移轉ニ因リテ擔保ヲ付セラルヘキ債權ノ額トヲ比較シ其ノ少キ額ニ依ル

擔保ノ順位ノ移轉ヲ目的トスル法律行爲ニ付テハ其ノ移轉ニ因リテ優先ノ順位ヲ取得スヘキ擔保ノ價額ト之ヲ喪フヘキ擔保ノ價額トヲ比較シ其ノ少キ額ニ依ル

第八條　地役ノ價額ハ地役ニ因リテ生スル要役地ノ增價額ト承役地ノ減價額トヲ比較シ其ノ多キ額ニ依ル

第九條　定時ノ給付ノ價額ハ全期間ノ給付ノ總價額ニ依ル但シ其ノ價額ハ動產ノ賃貸借ニ付テハ一年、不動產ノ賃貸借及商工業ノ見習ヲ目的トセサル雇傭契約ニ付テハ五年、其ノ他ノ場合ニ於テハ十年分ノ給付ノ價額ニ超ユルコトヲ得ス

期間ノ定ナキ定時ノ給付ノ價額ハ前項但書ニ定ムル期間內ノ給付ノ總價額ニ依ル

前二項ノ場合ニ於ケル相手方ノ給付ノ目的カ金錢ニ非サルトキハ其ノ價額ハ定時ノ給付ノ價額ト同一ト看做ス

第十條　當事者一方ノ給付ノミノ價額ヲ算定スルコト能ハサルトキハ其ノ給付ハ相手方ノ給付ト同一ノ價額ヲ有スルモノト看做ス

第十一條　果實、損害賠償及費用カ法律行爲ノ附帶ノ目的ナルトキハ其ノ價額ハ之ヲ法律行爲ノ目的ノ價額ニ算入セス

第十二條　法律行爲ノ目的ノ價額ヲ算定スルコト能ハサルトキハ其ノ目的ハ五百圓ノ價額ヲ有スルモノト看做ス但シ其ノ最低價額五百圓ニ超エ又ハ其ノ最高價額之ニ滿タサルコト明カナルトキハ其ノ最低價額又ハ最高價額ヲ以テ法律行爲ノ目的ノ價額トス

第十三條　左ニ揭クル事項ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於テハ第二條ノ區別ニ從ヒ其ノ十分ノ

五ノ割合ヲ以テ手數料ヲ受ク

一　承認、許可及同意

二　當事者雙方ノ履行セル契約ノ解除

三　遺言ノ全部又ハ一部ノ取消

四　同一ノ公證人役場ニ於テ證書ニ作成セラレタル法律行爲ノ補充又ハ更正

第十四條　法律行爲ニ付テノ證書作成ノ手數料ハ證書ノ紙數四枚ヲ超過スルトキハ超過シタル部分ニ付一枚每ニ二十錢ヲ加フ

前項ノ紙數ハ一行二十字詰二十四行ヲ以テ一枚トス但シ一枚ニ滿タサルトキト雖之ヲ一枚トス

第十五條　法律行爲ニ非サル事實ニ付テノ證書作成ノ手數料ハ本令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外其ノ事實ノ實驗及證書ノ作成ニ要シタル時間一時間ニ付一圓トス但シ一時間ヲ超過スルトキハ一時間每ニ五十錢ヲ加フ

前項ノ時間ハ一時間ニ滿タサルトキト雖之ヲ一時間トス

第十六條　株主總會其ノ他ノ集會ノ決議ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於テハ前條ノ例ニ依リ手數料ヲ受ク

第十七條　法律行爲ト共ニ之ト牽連スル事實ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於ケル手數料ハ第十五條ノ例ニ依ル但シ其ノ額カ法律行爲ノミニ付テノ證書作成ノ手數料ノ額ヨリ少キトキハ其ノ多キ額ニ依ル

第十八條　數個ノ牽連セサル事實ニ付證書ヲ作成スル場合ニ於テハ手數料ノ額ハ各事實ニ付之ヲ算定ス

第十九條　祕密證書ニ依ル遺言書ノ方式ニ關スル記載ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ手數料ハ一圓トス

第二十條　委任狀、受取書又ハ拒絕證書ヲ作成

スル場合ニ於テハ其ノ手數料ハ五十錢トス

第十五條　第一項但書及第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十一條　認證ノ手數料ハ證書作成ノ手數料ノ十分ノ五トス

第二十二條　私署證書ニ確定日附ヲ附スル場合ニ於テハ其ノ手數料ハ三十錢トス

第二十三條　證書ノ正本ニ執行文ヲ付與スル場合ニ於テハ其ノ手數料ハ五十錢トス

第二十四條　證書ノ正本若ハ謄本又ハ其ノ附屬書類ノ謄本ノ交付ニ付テノ手數料ハ一枚ニ付十五錢トス但シ公證人法第五十五條第一項ノ場合ニ於テハ一枚ニ付十錢トス

第十四條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十五條　證書ノ原本及其ノ附屬書類ノ閲覧ニ付テノ手數料ハ一回ニ付十錢トス

第二十六條　手數料ノ定ナキ事項ニ付テハ最類似スル事項ト同一ノ手數料ヲ受ク

第二十七條　公證人夜間ニ於テ又ハ病床ニ就キ職務ヲ執行シタルトキハ其ノ手數料ハ各本條ニ定ムル額ニ其ノ十分ノ三ヲ加フ

第二十八條　公證人職務ノ執行ニ著手シタル後囑託人ノ請求ニ因リ之ヲ止メタルトキ又ハ囑託人若ハ列席者ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因リ之ヲ完結スルコト能ハサルトキハ第十五條ノ例ニ依リ手數料ヲ受ク但シ其ノ手數料ハ完結シタル場合ニ於テ受クヘキ手數料ノ額ニ超過スルコトヲ得ス

第二十九條　公證人其ノ職務ヲ執行スル爲出張シタルトキハ左ノ日當及旅費ヲ受ク但シ日當ヲ受クルハ一里以外ノ地ニ至リタルトキ、宿泊料ヲ受クルハ宿泊ヲ要シタルトキニ限ル

日當　一日ニ付　三圓但シ四時間以内ハ二圓

汽車賃　一哩迄毎ニ　五錢

船賃　一海里迄毎ニ　五錢

車馬賃　一里迄毎ニ　三十錢

宿泊料　一泊ニ付　三圓

第三十條　公證人ハ手數料、日當及旅費ノ額ヲ減スルコトヲ得ス

第三十一條　數人ノ囑託人アル場合ニ於テハ公證人ノ受クヘキ手數料、日當及旅費ハ各囑託人連帶シテ之ヲ支拂フヘキ責ニ任ス

第三十二條　公證人ハ公正ノ效力ヲ有セサル文書ノ作成ニ付手數料、日當及旅費ヲ受クルコトヲ得ス但シ其ノ文書ノ作成ニ付公證人ニ過失ナカリシトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十三條　公證人ハ囑託セラレタル事項ニ付其ノ職務ヲ完結シタル後ニ非サレハ手數料、日當及旅費ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得ス

第三十四條　囑託人市區町村長ノ證明書ヲ以テ支拂ノ資力ナキコトヲ證明シタルトキハ公證人ハ手數料、日當及旅費ノ支拂ヲ假ニ免除スルコトヲ得

第三十五條　公證人ハ囑託人ヲシテ手數料、日當及旅費ノ概算額ヲ豫納セシムルコトヲ得

囑託人ハ豫納ニ代ヘテ前項ノ概算額ヲ供託スルコトヲ得

囑託人概算額ノ豫納又ハ供託ヲ爲ササルトキハ公證人ハ其ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得

第三十六條　公證人手數料、日當及旅費ノ支拂ヲ請求スルトキハ計算書ヲ交付スルコトヲ要ス

計算書ニハ各項目ニ付本令ノ條項ヲ指示シ其ノ計算ヲ明ニスヘシ

第三十七條　囑託人手數料、日當及旅費ノ支拂ヲ爲ササルトキハ公證人ハ囑託セラレタル事項ニ付正本、謄本及執行文ノ付與ヲ拒絶スル

コトヲ得

第三十八條　區裁判所カ公證人ノ職務ヲ行フ場合ニ於ケル手數料、日當及旅費ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納付セシムルコトヲ得

附　則

本令ハ公證人法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際未タ完結セサル事項ニ付テノ手數料、日當及旅費ハ公證人規則ニ依ル

●公證人懲戒委員會規則

（明治四十二年六月二十九日勅令第百七十五號）

朕公證人懲戒委員會規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證人懲戒委員會規則

第一條　懲戒委員會ハ委員長一人委員四人ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　委員長ハ控訴院長ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ當該控訴院ノ所在地ニ在職スル判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員四人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第三條　委員會ハ委員長及委員ノ全員出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第四條　委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

前項ノ場合又ハ委員中事故アルトキ若ハ闕員アルトキハ委員長豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命ス

第五條　委員長及委員ハ自己又ハ其ノ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スルコトヲ得ス

第六條　委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス

第七條　委員會ニ書記二人ヲ置ク

第八條　書記ハ當該控訴院ノ裁判所書記ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第九條　書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條　司法大臣ハ公證人ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證憑ヲ具ヘ書面ヲ以テ委員會ノ審査ヲ要求スヘシ

第十一條　前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘシ

委員會ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ノ出頭ヲ命スルコトヲ得

第十二條　委員會ニ於テ議決ヲ爲シタルトキハ其ノ理由ヲ具シ司法大臣ニ報申スヘシ

第十三條　司法大臣ハ公證人ニシテ公證人法第十五條第一項第三號ニ該當スルモノト思料スルトキハ證憑ヲ具ヘ書面ヲ以テ委員會ノ審査ヲ要求スヘシ

前二條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十四條　委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム

附　則

本令ハ公證人法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●行政裁判法（明治二十三年六月三十日法律第四十八號）

朕行政裁判法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判法

第一章　行政裁判所組織

第一條　行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條　行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク

評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

行政裁判所ニ書記ヲ置ク其員數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條　長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス

長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ內閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セラルルモノトス

書記ハ長官之ヲ判任ス

第四條　長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

一　公然政事ニ關係スルコト

二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議員府縣郡市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト

三　兼官ノ場合ヲ除ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト

四　商業ヲ營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

第五條　第六條ノ場合ヲ除ク外長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルルコトナシ

行政裁判所ノ長官又ハ評定官ヲ兼任スル者ハ其本官在職中前項ヲ適用ス

懲戒處分ノ法ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條　長官及評定官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ内閣總理大臣ハ行政裁判所ノ總會ノ決議ニ依リ其退職ヲ上奏スルコトヲ得

第七條　長官ハ行政裁判所ノ事務ヲ總理ス

長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其先ナル者之ヲ代理ス

第八條　長官ハ自ラ裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得

部ヲ分ツノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條　行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル若シ缺席ノ爲偶數トナリタルトキハ官等最モ低キ評定官ヲ議決ヨリ除ク官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其後ナル者ヲ除ク

議決ハ過半數ニ依ル

第十條　長官又ハ評定官ハ左ノ場合ニ於テ評議及決議ニ加ハルコトヲ得ス

一　裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ關スルトキ

二　裁判スヘキ事件一私人ノ資格ヲ以テ意見ヲ述ヘタルモノ又ハ理事者代理者若クハ職務外ノ地位ニ於テ取扱ヒタルモノニ關スルトキ

三　裁判スヘキ事件行政官タルノ資格ヲ以テ其事件ノ處分又ハ裁決ニ參與シタルモノニ關スルトキ

第十一條　前條ノ場合ニ於テ原告又ハ被告ハ原因ヲ疏明シテ文書又ハ口頭ヲ以テ長官又ハ評定官ヲ忌避スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ行政裁判所ハ本人ヲ同避セシメ之ヲ議決ス

第十二條　忌避若クハ除斥ノ原因タル事情ニ付キ長官又ハ評定官ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ長官又ハ評定官カ法律ニ依リ評議及決議ニ加ハルヲ得サルノ疑アルトキハ行政裁判所ハ本人ヲ同避セシメ之ヲ議決ス

第十三條　行政裁判所ノ處務規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　行政訴訟ノ辯護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル辯護士ニ限ル

第二章　行政裁判所權限

第十五條　行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス

第十六條　行政裁判所ハ損害要償ノ訴訟ヲ受理セス

第十七條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外地方上級行政廳ニ訴願シ其裁決ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

各省大臣ノ處分又ハ内閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

各省又ハ内閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十八條　行政裁判所ノ判決ハ其事件ニ付キ關係ノ行政廳ヲ覊束ス

第十九條　行政裁判所ノ裁判ニ對シテハ再審ヲ求ムルコトヲ得ス

第三十條　行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ決定ス

行政裁判所ト通常裁判所又ハ特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十一條　行政裁判所ノ判決ノ執行ハ通常裁

判所ニ囑託スルコトヲ得

第三章　行政訴訟手續

第二十二條　行政訴訟ハ行政廳ニ於テ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ告知シタル日ヨリ六十日以内ニ提起スヘシ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ス但法律勅令ニ特別ノ規程アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行政裁判所ノ指定スル日限ノ計算並ニ災害事變ノ爲メ遷延シタル期限ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス

第二十三條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判所ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第二十四條　行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判所ニ提起スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條　訴狀ハ左ノ事項ヲ記載シ原告署名捺印スヘシ

一　原告ノ身分、職業、住所、年齡

二　被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告

三　要求ノ事件及其理由

四　立證

五　年月日

訴狀ニハ原告ノ經歷シタル訴願書裁決書並ニ證據書類ヲ添フヘシ

第二十六條　訴狀ニハ被告ニ送付スル爲メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十七條　行政裁判所ハ原告ノ訴狀ニ就テ審査シ若シ法律勅令ニ依リ行政訴訟ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却下スヘシ

其訴狀ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ之ヲ改正セシムル爲メ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第二十八條　行政裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書ヲ差出サシムヘシ

答辯書ニハ原告ニ送付スル爲メ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十九條　行政裁判所ハ必要ナリト認ムルトキハ其期限ヲ指定シテ原告被告交互ニ辯駁書及再度ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第三十條　行政裁判所ハ訴狀及答辯書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互ニ送付スル代リニ所内ニ於テ之ヲ閲覽セシムルコトヲ得

第三十一條　行政裁判所ハ訴訟審問中其事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟ニ加ハラシメ又ハ第三者ノ願ニ依リ訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ行政裁判所ノ判決ハ第三者ニ對シテモ亦其效力ヲ有ス

第三十二條　行政官廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムルコトヲ得

代理者ハ委任狀ヲ以テ代人タルコトヲ證明スヘシ

第三十三條　行政裁判所ハ豫メ指定シタル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ召喚シテ審廷ヲ開キ口頭審問ヲ爲スヘシ

原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ爲スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場合ニ於テハ行政裁判所ハ文書ニ就キ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第三十四條　審廷ニ於テハ原告被告及第三者ノ辯明ヲ聽クヘシ

審廷ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル者ヨリ順次發言スヘシ

原告被告及第三者ハ事實上及法律上ノ點ニ就キ文書ニ盡ササル所ヲ補足シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證憑ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得

第三十五條　主務大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ得

行政裁判所ハ判決ヲ爲ス前ニ委員ヲシテ意見ヲ陳述セシムヘシ

第三十六條　行政裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリ又ハ行政廳ノ要求アルトキハ行政裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第三十七條　公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ公衆ヲ退カシムルノ前之ヲ言渡ス

第三十八條　行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命シ並ニ必要ト認ムル證憑ヲ徵シ證人及鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス其義務ヲ盡ササル場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ擧證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ之カ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十九條　行政裁判所ニ於テ審問中ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコトアリテ通常裁判ノ確定ヲ待ツノ必要アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止スルコトヲ得

第四十條　審問手續ニ關スル故障ノ申立ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

第四十一條　召喚ノ期日ニ於テ原告若クハ被告若クハ第三者出廷セサルコトアルモ行政裁判所ハ其審判ヲ中止セス

原告被告及第三者共ニ出廷セサルトキハ行政裁判所ハ審問ヲ行ハス直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第四十二條　裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判所ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ交付スヘシ

行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十三條　行政訴訟手續ニ關シ此法律ニ規程ナキモノハ行政裁判所ノ定ムル所ニ依リ民事訴訟ニ關スル規程ヲ適用スルコトヲ得

第四章　附則

第四十四條　此法律ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第四十五條　第二十條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス

裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第四十六條　從前ノ法令ニシテ此法律ト牴觸スルモノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條　此法律施行ノ前既ニ行政訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノハ仍從前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

●行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件（明治二十三年十月十日法律第百六號）

朕行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁

可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲ク事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

一　海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
二　租稅滯納處分ニ關スル事件
三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
四　水利及土木ニ關スル事件
五　土地ノ官民有區分ノ査定ニ關スル事件

●訴願法（明治二十三年十月十日法律第百五號）

朕訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲クル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一　租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
二　租稅滯納處分ニ關スル事件
三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件
四　水利及土木ニ關スル事件
五　土地ノ官民有區分ニ關スル事件
六　地方營察ニ關スル事件
其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條　訴願セシトスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條　各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條　裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條　訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ
訴願書ノ侮辱誹毀ニ渉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條　訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ之ニ署名捺印

スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ並下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條　多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ自分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條　行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條　法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第十條　訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス

第十一條　第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辯明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十三條　訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條　訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條　訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條　上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條　訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條　明治十五年十二月第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條　此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス

請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條　第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス

266
858

明治四十五年二月十七日印刷
明治四十五年二月二十日發行

清水書店編輯部

編輯者　井上圓三

東京市神田區今川小路二丁目四番地

發行者　葉多野太兵衛

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者　山田英二

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　博文館印刷所

東京市神田區今川小路二丁目四番地

發行所　清水書店

電話本局九六五番

振替口座東京七四四七番

266
858
CZ
773
06

036416-000-2

CZ-773-06

裁判所構成法

清水書店

M45

BBR-0069